第89号

発行日：令和元年6月19日
発行者：医学研究科広報委員会
印　刷：やまと印刷株式会社

弘前大学大学院医学研究科・医学部医学科広報紙

医学部ウォーカー

1面：弘前大学COI「第一回日本オープンイノベーション大賞内閣総理大臣賞」を受賞　**2面**：「むつ下北地域医療学講座」の設置にあたって／医学研究科長・医学部長寄稿、教授就任の挨拶　**3面**：教授就任の挨拶／山上の光賞を受賞して　**4面**：Young Asian Doctors Case Report Awardを受賞して／弘前大学学生表彰／SD章授与式　**5面**：医学科学位記伝達式／卒業生進路状況　**6面**：ベスト研修医賞選考会　**7面**：研究室研修優秀発表賞／**8面**：青森県知事と新入生との懇談会／世界自閉症啓発デー記念イベントin弘前を終えて／若手教員・医師だより　**9面**：関連病院勤務報告　**10面**：学生だより／青森あすまし温泉紀行　**11面**：留学だより／写真コラム　**12面**：海外臨床研修を体験して　**13面**：研究室紹介　生体構造医科学講座／神経解剖・細胞組織学講座、胸部心臓血管外科学講座　**14面**：部活動紹介　水泳部、山岳部、グリーン・キャンパス・クラブ　**15面**：テレビに出演して／書籍のおしらせ　**16面**：人事異動

題字　前弘前大学長　遠藤正彦氏筆

弘前大学COI「第一回 日本オープンイノベーション大賞 内閣総理大臣賞」を受賞

弘前大学COI研究推進機構 教授／COI副拠点長（戦略統括）　村下公一

平成三十一年三月五日㈫、弘前大学COIは東京・虎ノ門ヒルズで開催された内閣府等主催「第一回　日本オープンイノベーション大賞」の表彰式において、最高賞である「内閣総理大臣賞」を授与されました。

「日本オープンイノベーション大賞」は産学連携、大企業とベンチャー企業との連携、自治体と企業の連携など、組織の壁を超えて新しい取組に挑戦する「オープンイノベーション」の模範的なプロジェクトを政府（内閣府等）が表彰するもので、模範となるような取組、社会インパクトの大きい取組、持続可能性のある取組、併せてロールモデルとして関係機関が連携して積極的な水平展開をしている取組をその表彰の対象としています。

受賞の様子

審査の項目は連携の「目的（社会的ニーズ等への貢献）」「内容（先導性・独創性）」「効果（客観的な効果と持続可能性）」で、選考委員会委員は、池井戸潤氏（作家）、入山章栄氏（早稲田大学大学院経営管理研究科早稲田大学ビジネススクール准教授）、各務茂夫氏（東京大学教授産学競争推進本部イノベーション推進部長）、谷本有香氏（Forbes JAPAN副編集長）、Tom Kelley氏（IDEO共同経営者）、向井千秋氏（東京理科大学特任副学長・宇宙飛行士）の六名となっています。

弘前大学COIは、二〇〇五年から地域事業として丁寧に集めた健康ビッグデータをオープンにして予兆法・予防法などを開発するスキームを形成。経済効果など金額にみる効果のみならず、県民の健康への価値観のシフトにも大きく貢献するとして、その取組が大きく評価され、栄えある第一回の最高賞である「内閣総理大臣賞」を受賞しました。

左藤副大臣から表彰状を受ける

三月五日㈫には虎ノ門ヒルズの会場にて、表彰式に先立ち記念シンポジウムが開催されました。

受賞者によるパネルディスカッション「大学から見たオープンイノベーション」においては中路特任教授が登壇し、COIの課題や戦略的な取組について、特に岩木健康増進プロジェクトなどについて熱のこもった説明をし、また受賞に甘んじることなく大学としていかに変わっていけるのかという将来的な展望について講演しました。同「企業から見たオープンイノベーション」では弘前大学COI社会実装統括（花王㈱エグゼクティブ・フェロー）の安川拓次氏が登壇し、弘前大学COIを核に各企業が「アンダーワンルーフ」のもと、横に連携を広げている状況や成果について詳しく説明しました。

受賞者によるパネルディスカッションの様子

表彰式では、内閣府の左藤章副大臣が主催者を代表し挨拶しました。COIからは中路特任教授と私、村下が登壇し、表彰状とトロフィーの授与を受けました。また、中路特任教授は十二賞十四受賞者のすべての受賞者を代表してスピーチを行い、「名誉ある受賞を契機に、さらにオープンイノベーションを繰り広げていくということが我々に求められた使命である」と今後へ向けての熱意を語りました。

続いての審査公表では選考委員を代表して各務茂夫選考委員会主査から、弘前大学COIの取組にかかる実際の成果について紹介があり、併せて「（弘前大学COIの取組は）産学官民、市民というものが入ることによってより多様なステークホルダーが介在する形でのプロジェクトということで、我が国の次なるステージの模範となるべきオープンイノベーションプロジェクトと感じた」との講評をいただきました。

弘前大学COIでは今後もさらに社会課題の解決のため邁進していきます。最後になりましたが、この場をお借りして、COIの取組にお力をいただいている学内・外の先生方はじめご関係の皆様、参画機関・企業の皆様、すべての皆様の御支援に心からあらためて感謝を申し上げたいと思います。誠にありがとうございました。

受賞者一同の最前列にて

寄附講座

「むつ下北地域医療学講座（一部事務組合下北医療センター）」の設置にあたって

むつ下北地域医療学講座　教授　福田　眞　作

弘前大学からむつ市まで、約百五十km。ほぼ、弘前市から盛岡中心部までの距離と同じです。弘前市内からむつ病院まで、多くの診療科の先生方が、早朝あるいは前日にむつ市まで「診療応援＝外勤」に行っています。常勤医を配置できない事情について聞き取り調査を行ったところ、各診療科、様々でした。医師不足を筆頭にあげる診療科が多かった一方で、移動利便性の低さも大きな要因であると感じました。弘前市からむつ市まで、車ですと二時間四十分、電車ですと最短で四時間もかかります（弘前駅→東京駅の移動に要する時間と同じ）。むつ下北地域への移動利便性向上策として、下北半島縦貫道（約六十八km）の建設が進められていますが、全線開通の目途は立っていません。

むつ総合病院は、むつ下北地域の中核病院であり、そこで働く医師のほとんどは弘前大学出身者です。同病院は、平成二十二年十二月 弘前大学大学院医学研究科および弘前大学医学部附属病院と弘前大学専門医養成病院ネットワークに関する協定を締結しており、医学研究科および附属病院には、専門医養成を通した地域医療への貢献が求められてきたところであります。

しかしながら、先の聞き取り調査にあるような事情によって、むつ下北地域唯一の中核病院であるむつ総合病院がその役割を十分に果たし得るだけの医師の配置が行われていない現状にあります。近隣にクリニックや診療所が少ないために、患者さんが当該病院に集中しており、外来診察の待ち時間は長時間に及び、患者サービスの低下のみならず、医師の過重労働の原因にもなっています。

むつ市長およびむつ病院長のほか、病院職員の皆さんからの強い要請を受けて、今回の「むつ下北地域医療学講座」が誕生しました（自治体間の寄附講座としては六番目となる）。寄附講座の設置期間は三年の予定で、消化器内科、循環器・腎臓内科、内分泌代謝内科および整形外科から専任の講師（二名）・准教授（二名）を配置します。遠方にある医療過疎地域に対する医療支援のあり方に関する研究を行うとともに、むつ下北地域をフィールドとして各診療科が臨床研究、疫学研究を実施します。また、設置期間内に常勤医師の増員（消化器内科、循環器・腎臓内科、整形外科）と診療科の新設（内分泌・代謝内科）を実現し、地域医療の充実と地域住民の健康福祉の向上に寄与したいと考えています。

医学研究科長寄稿

急がば回れ

医学研究科長　若林孝一

平成が終わり、令和の時代を迎えました。昭和の最後の一日となった一月七日は私の誕生日であり土曜日であったと記憶していますが、研究室で学位論文を書いていました。それから三十年の間に時代は変わりました。国家公務員は完全週休二日制となり、無給医というものがなくなり、大学院生が増え、マッチングが始まり、新専門医制度が導入されました。今回は「急がば回れ」をキーワードに教育と研究について述べてみたいと思います。

今年の第百三回医師国家試験において弘前大学は新卒者の合格率が九八・三％であり、国立大学ではトップの成績を記録しました。しかし、この快挙は一朝一夕にしてなったものではありません。高合格率の要因の一つとして、「一年次からしっかりと勉強すること」を意識してきたことを挙げたいと思います。医学教育センターの佐々木IR部門長の解析によれば、医学科六年間の成績と最もよく相関するのは一年次の成績であることが判明しています。逆に入学試験の成績はあまり参考になりません。入学して新しい土地で一人暮らしを始め、生活も乱れず、一年間しっかりと勉強できた学生は、その後も順調に育ってゆく確率が高いのだと考えられます。最近、医学科の学生が卒業時までに修得しておくべき能力（アウトカム）として六六項目からなる卒業時コンピテンシーを定めました。同時に各学年のアウトカムも定めました。学生一人一人の成長の度合いを見定めながら、必要な修正を行う評価（形成的評価）が変えて一年に一度はフォーラムを開催し、基礎研究の充実と若手研究者の育成を進めたいと考えています。臨床医が研究に使える時間が減っているという現実はありますが、若手医師のキャリアアップには、専門医の取得と大学院における研究は車の両輪となる重要なものです。研究者の育成に時間を要することは今も昔も変わりません。あまり効率を求めず、結果に一喜一憂せず、じっくりと継続してゆくことが肝要であると思います。

研究面では最近、複数の若手教授から基礎研究の推進に力を注ぐべきであるとの声がありました。この問題は日本の医学界全体の課題でもあるのですが、私自身も以前から危惧していました。特効薬はないのですが、少なくとも学内的に意識を高めるためにも、今年度から基礎研究フォーラム（仮称）を立ち上げることにしました。学内には多数の研究者がいますので、がん、心血管疾患、脳科学、ゲノム医学など、テーマを求められています。

教授就任に際してのご挨拶

脳神経内科学講座　教授　冨山　誠彦

この度平成三十一年四月一日付で脳神経内科学講座教授を拝命いたしました。

ちょうど十年前に弘前大学神経内科から青森県立中央病院に移動し、臨床の第一線の場で働けたことは私にとって大きな財産となりました。大学では脳卒中の診療からしばらく離れていたのですが、県病で脳卒中ケアユニットを開設する時期に責任者となったことが縁で、県病が脳卒中診療の中核病院として機能するようになった姿を見届けられたことは、何よりの喜びです。私が何をしたというわけではなく、一緒に働いてくれた人たちの成果であることは言うまでもありません。また難病診療体制につきましても、地域の中核自治体病院の先生や青森県の協力を頂き、少しずつではありますが整備を進めることができました。認知症の初期診療体制の整備については、これからというところで移動となってしまいましたが、後任の先生がより素晴らしいものを作り上げてくれると思っています。

県病の脳神経内科には十年間に新たに六人の医師が参加してくれました。臨床だけでなく基礎研究まで一緒に行う機会を得たことは、まさに私にとって生きがいでもありました。このように今まで多くの方々の協力をいただきましたこと、この場をお借りして感謝申し上げます。

脳神経内科は実に広大な領域です。診療の場では、脳卒中を始めとする救急疾患から、在宅治療までおこなう慢性疾患まで幅広く、また多くの啓発活動や医療資源の基盤整備など多くの社会的活動も要求され、医療行政との関わりも深い分野です。さらに研究に至っては、近年の進歩が著しい分野ではありますが、まだ未知に充ち満ちていて、知的好奇心をそそる分野です。それだけにとてもやりがいのある分野であることは、私のささやかな経験からではありません。しかしながら青森県には脳神経内科医は少なく、十分な脳神経内科医療を提供できているとは言えません。私への第一の宿題は、脳神経内科の魅力を学生や研修医の先生たちに余すことなく伝えること、そして当地域で脳神経内科医をより多く育成すること、だと思っています。初代松永宗雄先生から脈々と受け継がれる神経学への情熱を引き継ぎ、診療・教育・研究に邁進しようと思います。これからもご指導、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

教授就任に際してのご挨拶

筑波大地域医療教育センター　教授　鈴木保之

この度、筑波大学医学医療系　教授（筑波大学附属病院、茨城県地域臨床教育センター、循環器統括局長）として四月一日より赴任しました。筑波大学卒業後、筑波に在籍したのは研修医の六年間だけで、しかもそのうち約半分は大学以外での研修でした。筑波を離れてから約三十年経ち、その間筑波エキスプレスが開通し、つくば市（私がいた頃は桜村でしたが）も大いに変貌を遂げていることに今驚かされています。

筑波大学は当初から医学部とは呼ばず医学専門学群と称し、いわゆる六年一貫の医学教育（筑波方式）を行い、国家試験の合格率も高く注目を集めました。現在は平成十六年に新たな筑波方式として改正され、国際基準に基づく医学教育分野の認証を受けています。講義が中心だった全カリキュラムから問題解決能力を養うことに重点を置いて、体験型のプログラムを充実するように変遷を遂げています。医学の知識量が膨大になったことで全てを授業形式で教えることは難しく、弘前で授業をしていた時も同様に感じていたことを思い出します。また、医学の進歩は目覚ましく、特に変化の激しい臨床の領域では数年で治療方針がまるっきり異なるようなことは珍しくありません。全てを教えることが重要ではないと思います。基本的な考え方や基礎となる事項は授業形式が良いかもしれませんが、それを展開させ、どのようなことが分からなければならないか、どこまでが現時点で分かっていることなのかなど自分で考える、自分で対応できるような問題解決能力を養うことが必要で、医学部の教員はそれをサポートすることが重要であると思います。

こちらに来て心臓血管外科の入局者は隔年に一人程度で医学生の外科医離れは筑波でも深刻なようです。筑波の心臓血管外科は私たちの頃から研修医でも術者にする習慣があり、今でも変わらないようですが、初期臨床研修医は外科に魅力を感じなくなっているようです。ここ数年弘前は毎年必ず心臓外科志望者がいましたが、弘前大学の胸部心臓血管外科の厳しいけれども若手でも術者ができるという体制を構築していただいた福田幾夫先生の御尽力のおかげだと思います。今後は弘前での経験を生かし、医学教育と若手の教育に役立てるよう頑張ってゆきたいと思っています。

弘前の桜、りんご、夏場の過ごしやすさは素晴らしいことでした。弘前大学での十七年間、先生方、看護師、臨床工学士、臨床検査技師、事務、その方々に色々とお世話になったことに対してこの場を借りて御礼申し上げます。

教授就任に際してのご挨拶

岩手医科大学神経内科・老年科　教授　前田哲也

平素より岩手医科大学の研究事業および臨床業務にご理解とご協力を賜り、大変お世話になっておりますことに感謝を申し上げます。私、前田哲也（まえだてつや）と申します。平成五年に弘前大学を卒業し、武部和夫教授の主宰する第三内科に入局して臨床を開始すると同時に、松永宗雄教授のご指導の下、脳神経疾患研究施設臨床神経部門の大学院生として研究を開始しました。多くの臨床経験を積ませて頂き、臨床視点に基づく基礎研究で学位を頂きました。当学へ赴任して三年が過ぎ、四年目の春になる今年、岩手医科大学医学部内科学講座神経内科・老年科分野の教授を拝命いたしました。母校である弘前大学でお世話になった諸先生方、現在もお世話になっている諸先生方には、これまでのご指導に改めまして心より感謝を申し上げます。今回、寄稿の機会を賜り、大変光栄に存じます。

岩手医科大学神経内科・老年科は初代の東儀英夫教授が一九八二年に開設され、二〇〇三年に二代目の寺山靖夫教授へと引き継がれました。約四十年に渡って本州最大の県土を有する岩手県の医療圏を、脳卒中、認知症、神経変性疾患、神経免疫疾患、頭痛・てんかんなどの神経疾患の臨床診療と関連する基礎研究を精力的に行なってきました。神経学は脳神経系のあらゆる疾患を対象としており、その病態は極めて多彩です。臨床経過も超急性期から慢性期まで全経過に関わる幅広い疾患が含まれ、治療については可能なものからいわゆる難病も多いことが特徴です。当教室の臨床力や研究力を維持し、さらに発展させることが私に与えられた使命と身の引き締まる思いでおります。

三年前、生来初めて赴任した岩手県でしたが、当教室には苦もなくスムーズに溶け込むことができました。それは教室を主宰されていた寺山靖夫教授はじめ、教室の先生方やスタッフの皆様のおかげに他なりません。神経疾患に対する真摯で研究心をもった姿勢や、フレンドリーな雰囲気がとても魅力的な教室です。岩手医科大学は今年、矢巾町に新病院を移設いたしますが、新たな病院となっても、当教室の気風を維持しつつ気概ある教室員と共に取り組んで、臨床研究、基礎研究、さらに地域医療にもしっかりと貢献して参ります。弘前大学の諸先生方のお力添えも賜りながら取り組んで参りたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

遠藤正彦先生「山上の光賞」受賞に際して

糖鎖工学講座　教授　伊東健

医学部で医学部長を務められ、十年にわたり弘前大学学長を務められた遠藤正彦名誉教授が、日本病院協会、全日本病院協会、セルジーン株式会社の共催による「山上の光賞」（さんじょうのひかり賞）（研究部門）を受賞されました。今年度は、医師部門二名、研究者部門一名、保健部門一名、ボランティア部門一名、公衆衛生部門一名の計六名が受賞された中でのご受賞です。「山上の光賞」は日本の健康・医療・医学分野において素晴らしい活躍をし、よりよい社会を築くことに貢献している八十歳以上の方々を顕彰するプログラムで、今年で第五回を迎えます。本賞は高齢を迎えてなお、その豊富な経験、知性、そして知識を駆使しながら、後に続く世代の歩むべき道を照らす「山上の光」として活躍を続けておられる方々を顕彰するものです。審査においても、そのご活動が「山上の光」として次の世代の啓発に繋がっていることを重視するということが記載されており、遠藤先生の研究が脈々と弘前大学に息づいていることも受賞に貢献したと言えます。関係各位のご努力に感謝し、お祝いを述べさせていただきたいと思います。

受賞に至った遠藤先生のご業績を述べさせていただきますと、まずは生化学、特に糖鎖工学を専門として学部学生や大学院生の教育に長年ご尽力してきたことが挙げられます。その研究の過程で、プロテオグリカンに関する三種のエンド型の糖鎖分解酵素を世界で初めて発見し、これを基にプロテオグリカンやヒアルロン酸の糖鎖の酵素的組み換えや人工合成という糖鎖工学の道を独自に拓かれました。また、4-メチルウンベリフェロン（4-MU）にヒアルロン酸合成阻害効果を介した抗腫瘍効果があることを発見されました。特に、アスベストなどへの暴露によって生じる悪性中皮腫はヒアルロン酸合成が盛んであること、4-MUはこれに効果的であることを発見しました。学長退任後も4-MUの抗腫瘍効果（特にすい臓がん）の研究を寄附講座で続けられ、今なお糖鎖工学の客員研究員として後進のご指導を続けておられます。がん免疫療法を発見した本庶佑先生がノーベル賞をとられましたが、遠藤先生はがん免疫療法に続く次世代の「がん間質を標的にした抗腫瘍療法」の先駆者の一人です。4-MUに関する研究は本学の宝であり、医療の基礎研究として今後においても取り組んでいくべきものと考えられます。

受賞式は令和元年五月二十一日㈫に東京のパレスホテルにおいて行われました。会場には四百名ほどの各界を代表される方々が集い、共催者代表の他、安倍総理大臣や根本厚生労働大臣などが祝辞を述べられました。医学部長、学長などの公務で忙しい中、コツコツと研究を続けこのような賞を受賞されたことは弘前大学の一教員として誠に誇りであり、まさに「山上の光」として後に続く我々の道を照らしています。この場をお借りし、弘前大学全教員とともに改めて受賞の喜びを分かち合いたいと思います。

第45回日本マイクロサージャリー学会 Young Asian Doctors Case Report Award を受賞して

附属病院　整形外科　助教　上里　涼子

第四十五回日本マイクロサージャリー学会において、Young Asian Doctors Case Report Awardを受賞いたしましたのでご報告いたします。

日本マイクロサージャリー学会は国内の学会ですが、二〇二〇年に第五回アジア太平洋マイクロサージャリー学会が日本で開催されるため、今回アジア各国から多くの先生が招待されておりました。その中で、新しい企画として「Young Asian Doctors Case Report Award Session」が開催され、そのSessionで発表させていただく機会を頂戴いたしました。

発表者は、中国二名、タイ、シンガポール、韓国、インド、日本から各一名の合計七名でした。私は、「Reconstruction for huge defect after wide excision of sarcoma on back, using combination flap of free latissimus dorsi musculocutaneous and local transposition flaps: A case report.」というタイトルで、整形外科腫瘍班との合同手術の症例を発表いたしました。症例は、背部の巨大な軟部悪性腫瘍の広範切除術後に対側の広背筋皮弁を行った症例です。遊離広背筋皮弁の予定でしたが、欠損が大きいこと、切除範囲が棘突起を越えて対側におよんだことから、皮弁の底部を一部連続させた状態で対側に移動させ、動脈吻合も行いました。発表後は、光嶋勲先生（広島大学国際リンパ浮腫治療センター教授）から、「皮弁のサイズが大きいため、遠位部を切離したら一部壊死していたと思います。皮膚を連続させたことは良い判断でした。私なら、動脈をもう一本探して保険をかけたかもしれません。」とコメントを頂戴いたしました。

私が発表することが決まった後、会長の五谷寛之先生に私の本当の年齢が漏れ、「Young Doctor」の基準年齢を四十五歳に引き上げていただいたと伺っております。〝Young〟の響きで、発表を承諾してしまったところもありますが、実際の外国人発表者は明らかに私よりもYoungでした。

今回の発表に際しまして、たくさんのご協力をいただきました主治医である大鹿周佐先生、小野浩弥先生、また、ご指導いただきました石橋恭之教授、藤哲名誉教授にこの場をお借りして深く御礼申し上げます。これからも、一例一例の症例に向き合い、治療法を熟考していきたいと思います。

会長の五谷寛之先生、座長の柿木良介先生、清川兼輔先生、Asian Doctorsと。

平成30年度 弘前大学学生表彰

教育委員会委員　今泉　忠淳（脳血管病態学講座　教授）

弘前大学では、研究活動や課外活動で活躍した学生団体および学生を、毎年表彰しています。平成三十年度弘前大学学生表彰式が、平成三十一年三月七日に、文京町キャンパスの大学会館にて行われました。今年度は医学科からは、［表］に示した一団体および五名（個人）が表彰を受け、佐藤敬学長から、学生一人一人に表彰状と記念品が贈られました。佐藤学長からは、お祝いの言葉とともに、一層の研鑽への期待が述べられました。

「よい医師」とはどんな医師でしょうか？知識や技術はもちろんのことですが、科学的な探求心（リサーチマインド）も重要です。医学科では、三年生が「研究室研修」で研究活動の一端を経験しています。これをきっかけに、学生も積極的に研究活動にも取り組んでくれることを期待しています。また、弘前大学医学部医学科では、勉学はもちろんのことですが、豊かな人間性の涵養も重要なことと考えています。その観点からも、学生の課外活動を推奨していますし、学友会や医学部同窓会の鵬桜会とも協力して、支援しています。

今後も、弘前大学医学部医学科の学生のみなさんが、学業および課外活動の両面で充実した大学生活を送ってくださることを期待しています。

［表］平成30年度学生表彰を受けた医学科の団体と学生

＜団体＞	
医学部ラグビー部	第61回東日本医科学生総合体育大会　準優勝
＜個人＞	
木村紗也佳（３年）	研究論文がJournal of Immunology（IF=4.539）に掲載
藤本　智朗（１年）	平成30年度東北学生柔道体重別選手権大会 -90kg級　優勝
横山理久斗（１年）	第61回東日本医科学生総合体育大会空手道男子 個人　形　優勝
岩渕　那海（１年）	第61回東日本医科学生総合体育大会 ソフトテニス女子　個人戦　準優勝
市沢　歩美（４年）	第61回東日本医科学生総合体育大会 ソフトテニス女子　個人戦　準優勝

平成31年度 SD章授与式

学務委員長　鬼島　宏（病理生命科学講座　教授）

平成三十一年度SD（Student Doctor）章授与式が、平成三十一年二月二十八日に基礎大講堂にて挙行されました。授与式では新五年次学生（三十一年度百十一名）が、医の倫理に従って行動することを誓うことで、臨床実習（bedside learning, BSL）を開始するという大きな意義があります。臨床実習では、医療現場で患者さんの前に立たせていただくことの責任の重さと、診療行為を通じて医学を学ばせていただくことへの感謝の念を持ちながら、医療チームの一員として真摯に行動することが求められています。

本学におけるSD章授与式は、加藤博之教授（総合診療医学講座）の発案で、平成十七年度から始まり、今回で十五回目となります。さらに平成二十六年度からは、共用試験（Computer Based Testing CBT, およびObjective Structured Clinical Examination OSCE）の合格者に対して、全国統一質保証システムの一環として、全国医学部長病院長会議がSD認定証を付与することとなりました。つまり、SD章は、臨床実習生の身分証（ID）であると同時に、臨床実習を開始するための必要な知識と技能を身につけた証でもあります。

授与式では新五年次学生全員がBSLユニフォームとしての白衣姿で臨みました。初めに若林孝一医学部長と学務委員長の挨拶があり、次いで福田眞作附属病院長訓示の後、新五年次学生代表の田澤宏龍君に附属病院長からSD章が授与されました。授与式には学生がOSCEでお世話になった模擬患者の方々や附属病院関係者も参加され、SD章を授与される学生を温かく見守ってくださる姿が印象的でした。最後に、新五年次学生代表が以下の「弘前大学医学部臨床実習生の誓い」を宣誓しました。

「弘前大学医学部臨床実習生の誓い」

臨床実習生の一人として医療の現場に参加するに際し、

1. 私は、人類への奉仕に自分の人生を捧げることを誓います。
2. 私は、学び得た医学知識をもとに、良心と尊厳をもって医学の務めを果たします。
3. 私は、生命の始まりから人命を最大限に尊重し続けます。また、人間性の法理に反して医学の知識を用いることはしません。
4. 私は、患者の健康を私の第一の関心事とします。
5. 私は、私への信頼のゆえに知り得た患者の秘密を、たとえその死後においても尊重します。
6. 私は、私を教え導く人々に尊厳と感謝の念を

（次ページへ続く）

（前ページより）

7. 私は、私の自由意志に基づき名誉にかけてこれらのことを厳粛に誓います。

なお、この「誓い」を常に心に留めて臨床実習に臨むよう、付与されたSD章の裏には、「誓い」が印刷されています。SD章授与式の目的を十分に理解して、五年次から始まる臨床実習に真摯に取り組んでほしいと思います。

平成30年度 医学科学位記伝達式

学務委員長　鬼島　宏（病理生命科学講座　教授）

平成三十一年三月二十二日午後三時三十分から基礎大講堂において、平成三十年度学位記（医学士）伝達式が、佐藤敬学長ならびに西澤一治鵬桜会理事長ご列席のもとで行われました。今回、医学部医学科の卒業生は百十八名であり、地域定着枠（AO入試入学、前期日程定着枠入学、学士編入試青森県枠）を中心とした半数以上の卒業生が青森県内で臨床研修を行い、弘前医療圏での活躍が期待されています。多くの学生が勉学の苦労を乗り越え、さらには医師国家試験合格の直後でもあり、会場内は笑顔の花が咲いていました。なお、今回の医師国家試験合格率は九八・三％（一一六／一一八）であり、全国八十大学中第三位、四十二国立大学中の堂々第一位となりました。

伝達式では、若林孝一医学部長が卒業生一人一人と固い握手をかわしながら、学位記の伝達が行われました。会場を埋め尽くした卒業生に加えて、保護者やご来賓の方々、さらには教育指導にあたった教員も、新たな門出の喜びを卒業生と共有しました。伝達式の後半では、若林医学部長から挨拶があり、社会全般から常に質の高い医療が期待されている現状の下、地域医療の担い手であり、かつ世界をリードするようなプロフェッショナルとして実力を発揮していただきたい旨が強調されました。西澤鵬桜会理事長からは、同窓会の輪は全国に広がっていることなどのご紹介がありました。会場には金屏風と見事な花が添えられ、男子卒業生の凛々しいスーツ姿、女子卒業生の華麗な袴姿、着物姿も加わり、厳粛な中にも華やかな雰囲気のもとで、式が終了しました。

学位記伝達式後の午後七時からホテルニューキャッスルにおいて、医学部医学科第六十五回卒業記念謝恩会が開催されました。集合写真撮影後は、謝恩会幹事による明快な司会で開幕しました。若林医学部長、佐藤学長の祝辞があり、福田眞作病院長による乾杯の音頭がありました。会が始まると、各先生を囲み勉学やクラブ活動の想い出を振り返ったり、今後の進路について語り合ったりと、卒業生は限られた時間を惜しむように過ごしていました。会の途中では、卒業生有志による余興、恒例となった学長・医学部長・学務委員長とのジャンケン大会、附属病院長によるクイズなどで、会場は大いに沸き、あっという間の二時間が経ちました。最後に教授やご来賓の先生方が壇上に登り、卒業生から花束が贈られ、謝恩会の幕が閉じられました。

一学年全員が集合する機会は、多分これが最後ではなかろうと思います。弘前大学医学部医学科卒業という誇りを背負い、これからも切磋琢磨して、全国で活躍してくれることを願うものです。

弘前大学 後援会のご案内

会長　石戸谷　忻　一

弘前大学後援会では、学生の学業、課外活動への助成、学生の進路指導に必要な助成等学生生活の多岐にわたる分野の助成を行っております。つきましては、何卒本会の趣旨にご賛同頂きまして、各位の格別のご高配、ご支援を賜りますよう、切にお願い申し上げます。

なお、入会方法等の詳細については、弘前大学総務部総務広報課（Tel：0172-39-3012、E-mail：jm3012@hirosaki-u.ac.jp）までご連絡いただくか、弘前大学後援会ホームページ（http://www.hirosaki-u.ac.jp/kouen/index.html）をご覧ください。

第113回医師国家試験結果ならびに平成30年度卒業生の進路状況

学務副委員長　袴田健一（消化器外科学講座　教授）

まずは朗報からです。第百十二回医師国家試験の結果が公表され、本学新卒者の合格率は九八・三％（一一六／一一八）でした。全国第三位、国立大第一位の好成績です。卒業生諸君の検討を讃えたいと思います。ちなみに、全体ならびに国立大学新卒者合格率はそれぞれ九二・四％、九三・四％、また全国一位と二位は自治医大（一〇〇％）、順天堂大（九九・二％）でした。

昨年から出題数が四百題に減り、試験日程が二日間に短縮されました。一方で、臨床実地問題に重点が置かれるなどの変更が行われました。内容も臨床推論力を評価する実践的問題が増えています。皆さん、よく勉強され、臨床実習を通じて実地臨床能力を高めた努力が結果に結びついたものと思います。

次に、卒業生の進路状況について報告します。青森県内の病院に勤務された割合は四五％で例年同様でした。本年度の特徴は青森以外の東北地方への勤務が減少し、関東圏の病院に勤務した卒業生の割合が一〇％ほど増加しました。入試制度の変更や地域枠制度の定着、新専門医制度の導入が背景要因かと思われます。

H26～H30 卒業生進路状況

	H26年度卒業生進路		H27年度卒業生進路		H28年度卒業生進路		H29年度卒業生進路		H30年度卒業生進路	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
青森県	59	51.3%	50	41.3%	57	47.1%	56	41.2%	53	44.9%
北海道	6	5.2%	6	5.0%	2	1.7%	3	2.2%	3	2.5%
青森県以外の東北地方	9	7.8%	19	15.7%	14	11.6%	15	11.0%	9	7.6%
東京以外の関東地方	8	7.0%	21	17.4%	16	13.2%	27	19.9%	25	21.2%
東京都	14	12.2%	4	3.3%	11	9.1%	4	2.9%	10	8.5%
中部	5	4.3%	7	5.8%	5	4.1%	14	10.3%	9	7.6%
近畿以西	5	4.3%	7	5.8%	4	3.3%	6	4.4%	7	5.9%
国試不合格・その他	9	7.8%	7	5.8%	12	9.9%	11	8.1%	2	1.7%
合計	115	100.0%	121	100.0%	121	100.0%	136	100.0%	118	100.0%
医師国家試験合格者	108	93.9%	116	95.9%	109	90.1%	125	91.9%	116	98.3%

平成30年度 ベスト研修医賞選考会

卒後臨床研修センター長　加藤博之（総合診療医学講座　教授）

平成三十年度ベスト研修医賞選考会が平成三十一年二月二十二日十八時より、医学部臨床小講義室で開催された。ベスト研修医賞は平成十六年度から始まった卒後臨床研修必修化に合わせて本学に創設された賞であり、今回で十五回目を迎える。当日は、臼谷真理先生、木村温子先生、蓮井研悟先生（五十音順）の三名の研修医が、「ここがポイント！　研修医の心がけ」と題し、自分が研修生活の中で重視してきた事について、一人八分間ずつスピーチを行なった。聴衆は学生および教職員で、スピーチのあと参加した学生諸君による投票が行なわれた。投票の結果、蓮井研悟先生が平成三十年度ベスト研修医に選ばれた。引き続き附属病院内の弘仁会食堂で表彰式が行われ、蓮井先生に賞状、トロフィー、記念品が贈られた。その他にも各種特別賞として、今年度コメディカルスタッフから最も高い評価を受けた臼谷先生に「ベストパートナー賞」、研修医が提出すべき各種症例レポートを最も頑張って書き上げた木村先生に「レポート大賞」、この一年間の研修医向け各種セミナーの出席率が最高であった蓮井先生に「セミナー賞」が贈られた。さらに事務方からも、研修関係の事務手続きに今年最も迅速かつ正確に協力してくれた鈴木幸雄先生に、感謝の意を込めて「グッドレスポンス賞」が贈られた。五年生から恒例となった「ベスト指導医賞」の発表が本年も行われるとともに福田病院長から金一封も贈られ、会場は大いに盛り上がった。学生二十名以上に教職員を加え総勢五十～六十名の参加者があり、教職員、研修医、学生がみな、この一年の思い出について心ゆくまで語り合い、会は盛会裏に終了した。

本賞の本学独自のユニークな特徴は、最終選考を学生が投票により行なうことであり、このことは教育上大きな意味を持っている。「Teaching is learning」という言葉があるように、研修医にとって学生を指導することは重要な学びともなっている。一方、研修医から学ぶ学生は、同時に研修医に対する格好の評価者ともなり得る。医師の育つ過程には、このような双方向に作用する〝人と人との きずな〟が不可欠である。これからも本賞が、人と人との結びつきを大事にする本学の文化の醸成に貢献できれば幸いである。

ベスト研修医賞選考会で研修医の発表に聞き入る参加者たち。

ベスト研修医賞の投票を行なう学生諸君。

弘仁会食堂を会場に行われたベスト研修医賞表彰式。

ベスト研修医賞を受賞して

二年次　蓮井研悟

平成三十一年二月二十二日、平成三十年度弘前大学医学部附属病院ベスト研修医賞選考会が医学研究科臨床小講義室で開催され、ご指導頂きました先生方、実習で関わりましたたくさんの学生の皆さんにご参加頂きました。当日は、卒後臨床研修センター運営委員会で選出頂きました臼谷真理先生、木村温子先生と共に「ここがポイント！　研修医の心がけ」というテーマで、研修生活の中で重視してきた事柄を、十分間ずつスピーチさせて頂きました。三者三様、研修中の悩みや学生の皆さんにとって有益な情報、今後の意気込みを盛り込んだスピーチとなり、改めて苦楽を共にした同期と歩んだ研修生活を振り返る貴重な機会となりました。私自身、学士編入で前大学では、ES細胞やiPS細胞を用いた増殖分化機構を研究する発生学と細胞の腫瘍化を専門としていました。同時期に、故日野原 重明先生の終末期医療の普及をテーマにした医学部講義を受講する機会があり、がん患者さんのサポートを通して臨床、ベッドサイドの魅力に引き寄せられ、弘前大学医学部へ学士編入致しました。四年生の研究室研修では、遠藤正彦先生の研究室で膵がんの微小環境と糖鎖工学に関する研究に携わる機会に恵まれ、難治性腫瘍、消化器がんを専門にしようと決意しました。初期研修中も内科、腫瘍に関連する分野を

最優秀指導医賞を受賞して

原　裕太郎
（附属病院　医員　消化器外科，乳腺外科，甲状腺外科）

消化器外科学講座の原裕太郎と申します。

最優秀指導医賞を受賞させていただいて、非常に嬉しく思います。共に診療にあたることができ、現六年生達に感謝の気持ちを抱いております。

昨年度春、四年目の医師になり、学生の頃以来の大学に戻ってまいりました。久しぶりに病棟に行くと、BSLの学生達が緊張した面持ちで立っており、数年前の自分達を思い出しました。同時に、臨床一年目の彼らも数年後には、一人前の医師となり患者さんを救っているのだなと想像すると嬉しい気持ちになりました。

僕は消化器外科医なので、もちろん消化器外科の専門的な内容についても指導いたしましたが、臨床一年目の彼らに臨床医として基本的なことを伝えたいという思いで指導に当たりました。患者さんとの接し方、話し方、診療の中でプロブレムが起きた時の考え方、検査の目的など、自分が諸先輩方に指導いただいたことを伝えるよう努力いたしました。そして、なにより患者さんが良くなると嬉しいということ、そのためにいい仕事をしようしていることが伝わっていれば嬉しいです。

診療には少しの楽しさと笑顔も大切と思っているので、ピリピリせずゆるくふわりとしたスタイルをとっているつもりでいます。もちろん、配下に置かれた後輩達の指導の場面では、愛情を込めて進撃の巨人と化します。

また、学生指導に当たることで自分自身の知識の整理にもなりました。処方なり、検査なり、手術における一手なり、すべてに意図があることであり、それをシンプルに説明できるよう心がけました。

困っている患者を救う気持ちと力を持った臨床医がひとりでも多く生まれることを期待しています。自分たちができる最高の指導を後輩達に紡いでいき、より良い医療を患者さんに提供できればと思います。ありがとうございました。

最優秀指導医賞を受賞して

髙安　忍
（附属病院　助教　内分泌内科，糖尿病代謝内科）

最優秀指導医賞をいただき、心より感謝申し上げます。学生のみなさんに忖度なしに選んでもらっての受賞は、教育に携わる一医師として最高の栄誉と考え、誇りに思います。率直に言って、教員にとって教えることは義務ですし、学生にとっては教育を受ける権利があり、またそれは医師になるために必要な義務でもあります。個人の理解や興味、好みが介在してその授受に積極性や円滑さの差が出ることもありますが、一貫して自分の専門である内分泌学について理解してもらいたいと思って指導した結果と、本当にうれしく思います。

今日の医療は日進月歩で、様々な研究からevidenceが生まれて検査、診断、治療が変化、改定され蓄積されています。国家試験対策の参考書をみても、自分が学生のときとは比べものにならないvolumeに驚きます。情報は日々更新され、多様な媒体を経て簡単に得られる世の中になりましたが、学生も医師もその山に埋もれながら、必要なものだけを抽出しなければなりません。Humanityを考える指導については少しおいておきますが、教育面では指導医の責務として、医学生が医師になるために必要な知識やスキルを取捨選択してどのように伝えるべきかを常に意識するようにしています。とかく、日本の受験社会を生きてきた我々は、startとgoal、原因と結果、病名と治療のように、最初の点と最後の点、問いと答えを覚えようとするだけで、その過程が重要であることを忘れがちです。過程に「なぜ？」を挟み込み、「考えること」を加えることで、忘れていても、知らなくても、起点と終点の両端にたどり着けるのです。さらに、「問うて考える」ことは新たなideaや革新にもつながります。これは診療と研究双方に通じることを自分自身実際に経験していますので、己の向上のためにも意識しながらなぜなぜの毎日を送っています。実習中にもそのように接し、伝えているつもりです。学生のみなさんは国家試験に合格することが目標ではなく、その先にある医師として生きる自分について「問うて考え」ながら実習し、誇りを持てる選択ができれば、そして私にその手助けができれば冥利につきます。もちろん、その見据えた先に内分泌内科・糖尿病代謝内科があって一緒に仕事ができれば、なおうれしく思います。

最後に提案です。自分の指導や熱意が伝わり、学生諸君からの気持ちがもらえることは非常にうれしく、motivationになることは間違いありません。臨床実習を通しての選考だけではなく、基礎実習、授業を通して指導いただいた基礎医学講座の先生方にも時期を違えてこのような機会があって然るべきと思います。ぜひご検討よろしくお願いいたします。

平成30年度 研究室研修優秀発表賞

脳血管病態学講座　教授　今泉忠淳

平成三十年度後期の「研究室研修」では、例年通り、三年次学生全員が医学研究科の各講座のいずれかに配属され、十月から二月はじめまで研修を行いました。そして、平成三十一年二月六日の午前午後、七日・八日の午後に臨床大講義室で発表会を行ないました。発表は、学生一人あたりの持ち時間は六分（発表四分、質疑応答一分三十秒）で、英語の口演とし「医学英語Ⅲ」の単位認定を行いました。英語で発表することについては、賛否色々なご意見もいただいていますが、百人以上の前で英語で口演するということは、とてもよい経験と考えています。また、セクションごとに三名の教員が審査を行い、平均点の上位三名（表）が優秀発表賞に選ばれました。

坂井南子さんは麻酔薬の抗うつ作用について、井上貴子さんは皮膚疾患の遺伝子異常について、畠中大維さんは人工的に作成するＳＤ血管組織についての発表でした。三名とも、研修の内容をよく理解し、自分の言葉で発表していたことが高く評価されたのだと思います。

四月十八日に、医学部長室で授賞式が行われ、若林孝一医学部長から三名の学生に優秀発表賞の賞状と副賞の図書カードが贈呈されました。若林学部長からは、医師になってからも是非研究に携わる機会を持ってほしい、と励ましの言葉が述べられました。また、指導教員の方からも暖かいコメントをいただきました。三名の今後のますますのご活躍を期待します。

一方、発表会では、教員が用意した原稿をただ棒読みしただけと見受けられた発表や、目的・方法・結果・考察・まとめの組み立てがきちんとなされていない発表もありました。研究室研修や発表会のありかたについては、議論のあるところではありますが、限られた時間の中でより充実した研修や発表会になるよう、改善していきたいと思っています。

学生諸君の大部分は将来臨床医として活躍することと思いますが、一時期、研究活動に従事することが、臨床医としての力量を高めてくれることは確かです。医師免許の取得・初期研修修了の後には、後期研修の一環として弘前大学大学院医学研究科に進学し、一度は研究に取り組んで下さることを期待しています。「博士号」は「専門医」とともに医師のキャリア上の重要な「一里塚」と思います。

最後に、学生を指導していただいた教員ならびに審査を担当して下さった教員の方々、また、支えて下さった学務グループの皆さんに、御礼申し上げます。

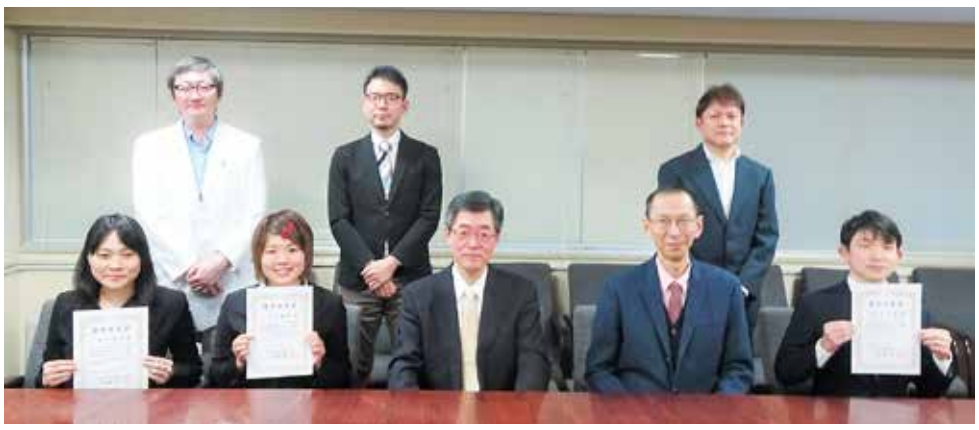


表　平成30年度研究室研修優秀発表賞受賞者（指導講座）

坂井南子（麻酔科学講座）
井上貴子（皮膚科学講座）
畠中大維（神経解剖・細胞組織学講座）　（発表順）

優秀発表賞を受賞して

医学科四年生　坂井南子
（指導講座：麻酔科学講座）

この度は、研究室研修優秀発表賞をいただき、誠にありがとうございます。ご指導賜りました、麻酔科学講座の二階堂義和先生には心より感謝申し上げます。

私は、「ケタミン抗うつ作用の中枢神経系作用機序の検討」をテーマに研修させていただきました。

ケタミンは静脈麻酔薬として広く使われています。そして近年、低用量ケタミンには抗うつ作用があることがわかりました。ケタミンが抗うつ薬として優れている点として、短時間で効果が現れること、治療抵抗性のうつ病にも効くことが挙げられ、すでに臨床試験も行われています。しかし、ケタミンがどのように抗うつ作用を発揮するのかについては、ほとんどわかっていません。

これまでの報告で、うつ病患者の死後の内側前頭前野では、早期応答遺伝子の一つである、Ａｒｃの発現低下がわかっていました。そこで私たちは、「うつモデルマウスの内側前頭前野でのＡｒｃの発現低下が、ケタミンによって改善するのか」について検討しました。

実験のほとんどは、弘前大学医学部附属動物実験施設で行いました。マウスの扱いに慣れることから始まり、ケージ交換などで毎回マウスと接することで、social interaction test といった行動実験も手伝うことにより症状が表れる症例が報告されています。遺伝子解析によって本疾患の診断がつくことにより遺伝や発症を抑えられる可能性があり今回そのような研究に携われたことを大変嬉しく思っております。

今回の研究室研修で学んだことは多くあります。一つ一つの実験的手技を丁寧かつ正確に遂行することは研究の基本であること。科学的な視点から色々な疑問を持ち続けること。基本的な疑問・質問を恐れずに聞く姿勢。そして周囲との人間関係を大切にすることが研究の大切な要素の一つであることを講座の方々から学ばせていただきました。今後もこの経験を生かし医師となった際にも、科学者としてのリサーチマインドを忘れずに邁進していきたいと考えております。最後にこのような貴重な経験をさせていただき、研究室研修に関わった皆様方に心より感謝申し上げます。

平成30年度後期研究室研修優秀発表賞を受賞して

医学科四年生　井上貴子
（指導講座：皮膚科学講座）

この度は研究室研修優秀発表賞にて表彰をしていただき、誠にありがとうございます。ご指導いただいた中野創先生、松井彰伸先生はじめ、皮膚科学講座の先生方、実験室の方々、事務の方々に心より感謝申し上げます。いつも講座の一員のように暖かく接していただき、本当にありがとうございました。

私の研究テーマは「家族性晩発性皮膚ポルフィリン症の遺伝子診断」でした。ポルフィリン症はヘム合成経路で働く酵素の活性低下・欠損によってポルフィリンやその前駆物質が蓄積する疾患です。その中でも晩発性皮膚ポルフィリン症は蓄積した物質が光線にさらされることで細胞毒性を発揮し光線過敏症を呈する疾患です。弘前大学皮膚科学講座では多くの遺伝性皮膚疾患について遺伝子診断を行なっています。日本における晩発性ポルフィリン症の症例はそのほとんどが後天性のものですが、今回携わらせていただいたのは常染色体優性遺伝を示す家族性晩発性皮膚ポルフィリン症の症例でした。家族性晩発性皮膚ポルフィリン症はヘム合成経路に不可欠な酵素をコードする遺伝子の変異に加え、アルコールや薬物などの増悪因子を持つことができるようになりました。また、免疫染色や実験データの解析方法といった、基礎研究に必要な手法も一から教えていただきました。そして、研究発表に向けて、研究結果をスライドにまとめる際には、学会発表に即した、グラフや図の書き方や英語表現を教えていただきました。研修の終盤では、自分一人で実験や解析などができるようになり、四ヶ月間でこんなに成長できるんだと嬉しく思いました。

今回取り組んだ基礎研究が積み重なって、やがて患者さんのもとへ届くと考えると、これが研究の楽しさであろうと感じます。

最後に、毎回親身に指導してくださった二階堂先生、発表に向けてアドバイスをいただきました麻酔科学講座の方々に、改めて御礼申し上げます。

研究室研修の優秀発表賞を受賞して

医学科四年生　畠中大維
（指導講座：神経解剖・細胞組織学講座）

この度、研究室研修の優秀発表賞に選出していただき、誠にありがとうございます。本研修においてご指導いただきました、浅野先生、下田先生をはじめ、神経解剖・細胞組織学講座の先生方には大変御世話になりました。深く感謝申し上げます。

私は、「ＡＳＣを主体としたヒト三次元人工脈管組織の作製と構造解析」というテーマで研修させていただきました。再生医療の分野で注目を集めているＡＳＣを用いた実験・解析を中心に研究を進め、最後の研究室研修の発表時においては、ＡＳＣを主体としたヒト人工脈管組織の脈管の変化に特に注目したスライド発表を行いました。

研修期間、浅野先生から様々なことを幅広く指導していただきました。初めは、実験や研究の見学から始まりました。実際に染色している様子や、組織切片を作製する様子、マウスにヒト人工組織を移植する様子など、さまざまな実験や解析のやり方を教えていただきました。一通り見学が終わると、先生指導のもと、実際に手を動かして実験や解析を行いました。組織切片を作り、ＨＥやトルイジンブルーなどによる染色や免疫染色を行い、その染色されたプレパレートを顕微鏡で観察し、実際にデータを取ってＰＣ等により解析するという一連の作業を経験させていただきました。研修が終盤にかかると、発表スライドの作り方や発表の仕方、論文形式の実践的なレポートの書き方を学び、先生からのアドバイスや添削など貰いながら作業を進めることができました。浅野先生からは、一人の研究生として最初から最後まで丁寧にご指導いただきました。本当に感謝いたします。

普段のオムニバスの講義形式では見えない、先生方の研究者としての一面が見れたこと、そして、実際に研究に触れられたことは自分にとって貴重な体験でした。浅野先生、下田先生をはじめとした神経解剖学・細胞組織学講座の先生方、研究でお忙しい中丁寧にご指導いただけたこと、改めてですが感謝申し上げます。また、今回優秀賞を受賞できたこと、とても光栄であり嬉しかったです。このような研究室研修という機会を設けていただき、本当にありがとうございました。今後もこの貴重な経験を活かして、医学の勉強に勤しみます。

青森県知事と新入生との懇談会

学務委員長　鬼島　宏
（病理生命科学講座　教授）

現在、三村申吾青森県知事と弘前大学医学部医学科学生との懇談会は年二回行われています。春は新入生を対象に、秋は五年生を対象としたものです。この懇談会がスタートしたのは平成十七年四月であり、その後、十四年にわたり連続して開催されています。今回は平成三十一年四月十日に医学部基礎大講堂で、医学科新入生全員が出席して実施されました。県側からは三村知事に加え、有賀玲子健康福祉部長、山中朋子医師確保対策監、齋藤和子保健医療対策監、小川克弘良医育成支援特別顧問らが出席し、佐藤学長・若林医学部長の列席のもとで行われました。

懇談会の初めに三村知事からは「青森県の目指す医療の姿」と題した講演がありました。地域を支える保健・医療・福祉一体化システムの実践で、青森県の平均寿命・健康寿命いずれもが大きく伸びてきており、短命県脱出に向けて大きく前進していると力説されました。弘前大学と連携した県の取り組みとして、(1)医療従事者の育成・定着、(2)医療機能の集約・連携強化、(3)がん・脳卒中対策の強化、(4)地域を支える医療システムの構築の四点が実践されていることや、「良医を育むグランドデザイン」に基づいて医師が学ぶ環境を整えていることが示されました。弘前大学医学部・関係医療機関・青森県地域医療支援センターが連携し、地域医療を志す医師のキャリアアップをサポートしてゆくことが強調されました。

知事の講演の後は、県スタッフも加わり、学生との活発な意見交換がありました。今回は、入学したばかりの新入生が対象とあって、盛り上がりに欠く会にはならないかというのは杞憂であり、学生からは地域の医療崩壊の危機が語られたり、尊敬する知事に握手を求めたりと、会場は大いに沸きあがりました。

現在、青森県からの寄附講座として総合地域医療推進学講座が設置されており、超高齢化や新・専門医制度を踏まえ、弘前大学を起点とし県内の大小医療機関を循環する本県オリジナルの地域循環型医師育成システムに関する総合的な研究を通じて、地域医療の充実に寄与することを目指しています。これに基づき、新入生の多くが卒業後に青森県に定着し、大学が担う教育・研究機能の一翼を担ってくれることを期待しています。

第7回世界自閉症啓発デー記念イベントin弘前を終えて

子どものこころの発達研究センター
特任准教授　栗林　理人

二〇〇七年十二月十八日の国連総会において、毎年四月二日を「世界自閉症啓発デー」とすることが決議されました。わが国においては、毎年四月二日から八日までを「発達障害啓発週間」として、自閉スペクトラム症をはじめとして、発達障害についての正しい理解の啓発に取り組む活動が全国各地で行われています。

弘前においても、二〇一六年の第四回世界自閉症啓発デーより、弘前市の協力を得て、旧市立図書館のブルーライトアップが実現しました。翌二〇一七年度からは、弘前市の提案で弘前城天守閣のブルーライトアップが実現し、本年度も見事に天守閣がライトアップされました。

二〇一九年四月一日には、青森県立弘前第一養護学校の高等部が旧青森県立岩木高等学校の校舎に移転となりました。高等部の生徒たちがより街中で学校生活を送ることとなり、今まで以上に弘前市民一人一人が発達特性を有する生徒たちと今後どのように向き合っていくのかを考える必要があると感じていました。そこで、今年度の記念イベントは、発達障害をより理解できるような講演会を企画することにしました。四月二日の午後六時より、弘前大学医学部コミュニケーションセンターにて、松本敏治先生（教育心理支援教室・研究所　ガジュマルつがる代表、元弘前大学教育学部教授）から『自閉スペクトラム症のコミュニケーション支援～「自閉症は津軽弁を話さない」研究から見えてきたことばとコミュニケーションの関係～』というテーマで、ご講演をしていただきました。松本先生は、自閉スペクトラム症の人が津軽弁だけでなく方言全般を使用したがらない理由について、方言のもつ社会的機能（心理的距離調整機能）を十分に理解できていないこととの関連を指摘されていました。講演後は、参加者から多くの質問が出され、活発な討議がなされました。

引き続き、弘前城天守ブルーライトアップ記念式が行われ、会場で現場から送られてきたブルーライトアップされた弘前城天守の写真をみて、最後に会場にて記念撮影をし、記念イベントは終了となりました。

今年度の世界自閉症啓発デーも、学生ボランティアの皆様の他、多くの方々のご協力を得て無事に終えることができました。今後も、この国が目指す障害のある方々が自らの持つ能力を存分に発揮できる『共生社会』の実現へ向けて、我々の活動が微力ながらも役立つようにと願っています。

若手教員・医師だより

臨床と研究と私

附属病院　麻酔科　助教　中井　希紫子

「臨床と研究…うーん、（やったこともないのに）研究は苦手だしなぁ、私は臨床医としてバリバリ頑張るぞ。」

十数年前、教室に仲間入りしたばかりの私はそう思っていました。麻酔科学の面白さに魅了されて選んだ道だったにもかかわらず、最初は日々臨床現場で目の前のことをこなすことで精いっぱいでした。そんなフワフワした私に、臨床研究に携わるチャンスを下さった廣田教授。研究と言えば動物実験が主体だった時代で、「毎日の臨床の中での研究。こんな研究もあるんだなぁ」と驚きました。幼稚でお恥ずかしいのですが、そんなふうにして臨床研究に携わり始めました。研究を進めていく中で、「こうしたらもっと良いのでは」などと色々考えながら臨床に関わることの面白さを知りました。あんなに研究に対して気後れしていた自分が、気づけば一生懸命取り組んでいたわけです。そして私は指導医の先生に恵まれました。今、年をとってわかったことですが、後輩と研究や仕事をしていて、自分でやってしまった方が早くて楽なことがあります。後輩がやるのを待って、それを一緒に見直して、次につなげる。その姿勢には、膨大な時間と労力が必要です。私の指導医は、私にまず考えてみなさい、書いてみなさいと言いました。そしてその後、疑問解決のためにいつもたくさんの時間を割いてくれました。今になって、それがどれだけ大変なことであったかがわかります。抱えている仕事量も膨大であったはずなのに。改めて尊敬の念を抱くとともに、指導医の先生の後ろ姿が今の私の財産です。

臨床医でありたい医師こそ、研究に携わったことがあるという経験が必要です。私たちは、日常の中で困難な症例に出会ったり大きな疑問にぶつかった時、同じ経験をした人や同じ疑問をもった人たちがいないかと論文を探します。そして論文を読むとき、自分で研究に携わったことがあるという経験が生きてきます。私自身、研究に携わってから論文の読み方が非常に変わったと実感したのを覚えています。

（次ページへ続く）

（前ページより）

現在私は、麻酔科医と母親の二足のわらじをはき、相変わらず綱渡りのような日々を送っています。毎日先輩後輩に助けられてばかりで、心から感謝の気持ちでいっぱいです。やるべき仕事を思うとおりにこなせず、自己嫌悪に陥ることの繰り返しですが、いつか必ず皆に恩返しできるよう精進いたしますので、これからもどうぞ宜しくお願いいたします。

魔女全員集合です！

若手教員・医師だより

医師だより

皮膚科学講座　助教　是川　あゆ美

こんにちは、皮膚科学講座の是川あゆ美と申します。

テーマは何でも良いようでしたので、昨年六月に第五回東アジア皮膚科学会（5th EADC）へ参加のため中華人民共和国の奥地にある〝昆明〟という都市を訪れたことを書かせていただきます。

私は学会で訪れるまで昆明について全く知らないし、聞いたこともありませんでしたので、出発前に色々インターネットで調べました。昆明（英語：Kumming）は雲南省の省都で、隣はすぐベトナムです。また、シャングリラの麓にある街として有名のようです。海抜は一，八九一メートルと高地にあり冬は温暖で夏涼しく中国内で最も快適な気候にある都市とされ、春城とも呼ばれています。少数民族が多く暮らしており、イスラム教徒の人も多い都市です。

学会は往復とも主催側が旅行会社を手配してくれまして、他大学の先生方と一緒の旅でした。昆明国際空港に到着すると目前にどこまでもどこまでも続く高原が広がっていて、壮大さに感動しました。街へ移動しますと、外国人はまだ珍しいようで日本語も英語も全く通じませんでした。

学会は市内からバスで三十分くらいのところにある巨大な会議場で行われました。

学会受付はなぜか学会場から車で二十分位離れたリゾートホテルの入り口に設置されていて、日本人七人分の受付に一時間かかりました。どうにか受付を済ませ、学会場に到着しましたが、入り口では荷物検査があり自由に出入りすることはできません。そして建物に入って非常に困ったことは、学会場が見当たらないことでした。建物入口にはEADCの看板がありましたが、中には案内がなく、学会パンフレットに従って行くものの行く先は閑散としていて私達は探しまわりました。そんなことをしていたら、圧倒されるほど非常に多くの中国の人たちが一気に集まってきて周りがあっという間にすごい混雑になりました。ほどなく知りましたが別の大きな国内学会（第二十四次全国皮膚性病学術年会）も同じ場所で開催されていて、二つの学会が同じ会議室を時間でシェアして入り乱れて利用することになっていたのでした。システムが分かってからはそれに従い学会へ参加することができました。

滞在中のホテルでは、ある先生の部屋は鍵が壊れていた、私はシャワーを浴びていたら浴室天井の換気用の鉄格子が半分落ちてきたなどトラブルもありましたが、学会では中国の皮膚疾患のことなど学べ、非常に有意義な学会参加だったと思います。

公益社団法人　青森医学振興会

沿　革　平成11年3月1日　弘前大学医学部医学科後援会鵬桜医学振興会発足（任意団体）
平成24年4月1日　公益社団法人青森医学振興会設立許可（青森県）

振興会では、21世紀の青森県の医学・医療を積極的に支援しようと次の事業を行っております。
- ○ 医学教育の助成　教育活動を活性化するための支援
- ○ 医学研究の助成　研究活動を高度化するための支援
- ○ 地域医療振興事業の助成　地域医療に貢献するための支援
- ○ 医学国際交流の助成　国際学術交流の支援

随時、会員の募集とご寄附の受付をしております。
会費と寄附金の納入方法は下記の通りです。

口座名	社団法人 青森医学振興会			
口　座	青森銀行　弘前支店　普通　1087485 みちのく銀行　大学病院前支店　普通　0198579 ゆうちょ銀行振替（旧 郵便振替）　02200ー4ー57580			※　各銀行の本支店及びゆうちょ銀行から振込む場合は、手数料無料です。
会　費	会員種別	年会費	お振り込みいただく場合は、お手数ですが、振興会事務局までご連絡（電話、メール）願います。	
	医学部教員	1万円		
	医学部卒業生	2万円		
	賛同する個人	1万円		
	賛同する団体	10万円		

お問い合わせ　TEL：0172（33）5111内線6519　E-mail：jimu@aomori-mpm.jp

関連病院勤務報告

地域の病院で研修して

青森市民病院　泌尿器科　細越　正吾

現在、青森市民病院で泌尿器科医として勤務している細越正吾です。医師として八年目、泌尿器科医として六年目になります。平成二十四年三月に弘前大学を卒業し、青森県立中央病院で初期研修二年を終えた後、医師三年目で弘前大学泌尿器科へ入局しました。そこから泌尿器科医として四年半、弘前大学医学部附属病院や関連病院で勤務し、専門医や学位を取得した後、平成三十年十月より現在の勤務地である青森市民病院で勤務しています。

青森市民病院は青森市の総合病院および研修指定病院であり、研修医も一年目と二年目合わせて二十名程が在籍しており、救急当直も担当しています。当院泌尿器科では腎癌や前立腺癌、尿路上皮癌といった悪性腫瘍から排尿障害、尿路感染症といった様々な疾患への診療を行っています。初診時の診察から検査、診断、治療方針の決定、手術、術後のフォローなどを一連の流れとして自分が責任を持って決定していくため、より深く疾患について考え、学ぶよい機会となっています。さらに総合病院のため、自施設内で他科とも連携し、治療にあたることもできます。

また、弘前大学の泌尿器科としては、関連施設も含め、外科手術や腎移植、内視鏡手術、ロボット手術に加えて、排尿障害や腎不全をはじめとする内科的治療、血液浄化療法など幅広く診療を行っています。特にロボット手術に関しては、全国でも最先端を走っています。さらに、弘前大学泌尿器科の特徴として、臨床に加えて、研究や国際学会での発表などacademicな分野でも積極的に活動を行っており、その点も非常に魅力的であると感じています。私も現在の青森市民病院に勤務しながら、今年の二月にアメリカ・ロサンゼルスで開催された日米泌尿器科学会合同の研究会に参加させて頂きました。そこではカリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）での手術見学の機会も頂きました。このように地域の関連病院に勤務しながら、国際学会への参加の機会もあり、非常に充実した日々を過ごさせて頂いております。

是非皆さんも青森県内の病院で一緒に働きませんか？

青森市民病院　糖尿病内分泌内科

水尻　諭

青森市民病院で糖尿病・内分泌内科医として勤務している水尻諭と申します。

平成二十六年三月に弘前大学を卒業し、青森市民病院

（次ページへ続く）

（前ページより）

で二年間初期研修を行いました。三沢市生まれ、弘前市育ちで青森市にはあまり縁が有りませんでしたが、大学の部活動の先輩の勧めもあり初期研修病院として青森市民病院を選択しました。研修開始時より内科系を志望しておりましたが、外ヶ浜中央病院での地域医療研修を通じて生活習慣病の管理の重要性を感じ、内分泌代謝内科への入局を決めました。入局後は三年間大学病院で糖尿病・内分泌疾患の臨床に従事しておりました。また、入局と同時に大学院に入学し、大門眞教授のご指導のもと、「いわき健康増進プロジェクト健診」で得られたデータの中から抽出した代謝異常に関連する疫学研究をおこなっています。大学院学位はアメリカ糖尿病学会でも発表させていただいた、「Lower serum calcium levels are a risk factor for a decrease in eGFR in a general non-chronic kidney disease population」で取得させていただきました。この場をお借りしてご指導いただきました先生方に御礼申し上げます。

大学院を修了後、二〇一九年四月より青森市民病院で勤務しておりますが、初期研修医時代にご指導いただいた先生方や見知ったスタッフの方が多くいらっしゃり、故郷に帰ってきたような感覚を覚えています。青森市民病院は二十診療科からなる、青森地域二次医療圏の基幹病院です。また、新医師臨床研修制度の研修指定病院でもあり、初期研修医は一年目・二年目を合わせて二十名が在籍しています。当院の初期研修では当科、消化器内科および循環器内科が各々二ヶ月間必修となっており、全研修医が当科での研修を行います。内分泌疾患や糖尿病を始めとする代謝疾患の他、脳梗塞や感染症などの診療も担当しており多岐にわたる症例を経験することができますので、興味のある方は是非見学や研修にいらしていただければと思います。

学生だより

一年間を振り返って

医学科二年生　藤巻百佳

弘前大学に入学してあっという間に一年が経ちました。この一年間で沢山の経験をし、非常に充実した生活を送ることができました。

私は、大学に入って強く感じたことがあります。それは自主学習の大切さです。一年生は比較的時間に余裕があったため、色々な学習や活動をすることができました。一つは、私の所属するサークル、HIZSK（ヒスク：弘前医ゼミに参加する会）での活動の中で、弘前保健所の所長さんに話を伺ったり、保健所の見学をしたりしたことです。臨床医としての働き方しか考えてこなかった私に、公衆衛生医師という働き方の選択肢を増やすきっかけとなりました。このような活動ができたことにより自分の将来の幅を広げることができました。二つ目は、教養教育科目で受けた「市民参加と地域づくり－津軽地域の医療者と患者のケアリング－」という授業です。この授業は保健学科の学生が多く、中には文系の学生もいてグループディスカッションでは様々な視点からの死生観に対する意見が聞けました。また、ゲストスピーカーとしてリウマチの患者さんの話も聞くことができ、医療者としての在り方やケアリングについて深く考える貴重な時間となりました。三つ目は、一年生最後の課題であったレポートです。私は、妊娠における母体の生理的変化をテーマにレポートを書きました。何も知識のない私には基本的なことでも難しく、自分で学習すること、知識を得ることに苦労しました。しかし、自主的に調べるという力を少しでも身につけられたことはひとつの達成感となり、同時に、大学は自主学習の場であることを強く認識させられました。

一年生で身につけた自主学習の力を二年生でも活かし、医学はもちろんそれ以外のことにも常に知的好奇心を持ち学び続けます。

医学科二年生　田添あき穂

弘前大学医学部医学科に入学してから一年余りが経ちました。一年生の間は毎日がむしゃらに勉強に勤しむというよりも、今後の医学生としての生活をどのように送るか、また卒業後どのような進路に進みたいかを深く考える一年となりました。高校生の時は医学部に合格することを目標にして、将来像を具体的に考えることなく勉強してきました。そのため、専門科目が始まっておらず、ゆったりと自分の進路を考えられる大学一年生という期間を有意義に過ごすことができたのではないかと思います。一年間自分の将来について考えてきましたが、まだ答えは出せていません。考えることに意味があると思っています。これから様々な人と出会ったり、様々な経験をしたりすることでも自分の将来は決められると思うので、焦らずゆっくりと自分なりの答えをだせたらいいです。

一年生の授業は文京キャンパスでの教養教育科目が中心でした。高校とは違う授業形態に最初は戸惑いましたが、自分の興味の有無に関わらず様々な分野の授業を受けたことはいい経験となりました。具体的には、りんごを中心とした果物の経済学、第二外国語としてのフランス語、ボディパーカッションを実技で学ぶ合奏法入門などです。他にもたくさんの授業を受けましたが、どれも内容の濃い忘れられないものばかりで、学問の楽しさを知ることができました。

二年生が始まり、目の前の試験や実習をクリアするのに必死の日々です。その中でも、専門科目を学べる喜びというのは少なからずあり、これは学問の楽しさを知ることができた教養教育のおかげかなとも思います。学ぶことの楽しさを忘れることなく、医学の勉強にはげんでいこうと思っています。

青森あずまし温泉紀行 ㉑

鬼島宏（病理生命科学講座・教授）

稲垣温泉
柏温泉
つがる地球村温泉
熊の湯温泉（鰺ヶ沢町）
熊の湯温泉（山ノ内町）

前回に引続き、西浜街道・十三街道です。津軽平野の南半分（中南津軽郡地域）は構造盆地に相当する地形でリンゴ栽培が盛んですが、北半分（西北津軽郡地域）は十三湖に続く大きな潟を開拓した稲作が中心です（明治廿七年県地図参照）。六月の頃は、まばゆい稲の緑が水田いっぱいに広がっています。

稲垣温泉（第八十一湯：つがる市稲垣町豊川：日帰り十七時迄）は、旧稲垣村の和風旅館ホテル花月亭の温泉です（日帰り入浴は玄関左手奥から入る）。ナトリウム・塩化物泉で、わずかに褐色調で塩味がします。立派な露天風呂にはぬる目の湯がはられており、のんびりと癒すのに適した温泉です。温泉は、稲作集落の町並みが残された旧稲垣村の中心にあるので、訪れた折には風情ある町並みも一緒に味わいたい。

柏温泉（第八十二湯：つがる市柏：二十二時迄）は、国道一〇一号沿いで、五所川原から旧柏村に入り、津軽道の交差点を越えた右手にあります。ナトリウム・塩化物泉で、褐色調で塩分がしっかり含まれており、温まる湯です。イオンモールつがる柏に近いため、帰りがてらに入浴すると良いかもしれません。

つがる地球村温泉（第八十三湯：つがる市森田：二十二時迄）は、キャンプやコテージなどの施設が整っている「つがる地球村」の藤山邸にあるナトリウム・塩化物・炭酸水素塩泉です。茶褐色調で若干の炭酸水素塩成分が感じられ、癖の少ない湯です。近くには、森田温泉（前号第七十八湯）・月見野温泉おらほの湯などがあり、旧森田町の高い温泉度に感服します。

熊の湯温泉（第八十四湯：鰺ヶ沢町一ツ森町湯湧淵：六月～十月：二十時迄）は鰺ヶ沢から赤石川沿いに白神山地へ向かう途中の鄙び系の一軒宿です。冬期閉鎖などの情報がホームページで更新されているので確認しながら訪れた、個性あるナトリウム・カルシウム・硫酸塩・塩化物・炭酸水素塩泉です。個人的には、ここや竜泊温泉（ウォーカー八十二号・第五十七湯）などの一軒宿に泊まってゆっくりするのが大好きな温泉の味わい方です。

長野県の**熊の湯温泉**（県外編第十七湯：長野県山ノ内町）は、鰺ヶ沢の温泉と同名ですが、志賀高原最古で翡翠色の温泉です。含硫黄-カルシウム・ナトリウム・炭酸水素塩・硫酸塩泉であり、典型的な緑色の硫黄泉で、内湯・露天風呂ともに素晴らしいの一言しか出ない名湯です。

さて夏場となる次回は、十和田・八甲田界隈を訪れる予定です。

留学だより

留学便り ～Freiburg大学から～

附属病院　消化器外科，乳腺外科，甲状腺外科
赤坂治枝

私は平成三十年四月より、皮膚科医の夫の研究留学に伴い、ドイツ南西部に位置するFreiburgに滞在しております。また、大変ありがたいことに、Universitätsklinikum Freiburg, Klinik für Allgemein- und Viszeralchirurgie にて、Stefan Fichtner-Feigl教授のもと、基礎研究に従事する機会を頂戴しました。この貴重な機会を与えてくださった袴田健一教授を始め、消化器外科学講座の先生方に心よりお礼申し上げます。

研究テーマは「悪性腫瘍の原発巣と転移巣における蛋白発現パターンと機能の違いについて」です。漠然としていますが、それもそのはずで、研究生活は始まったばかり、大学院生の様に、実験手技の確認からのスタートです。核心を突くような話は遙か彼方ですが、今後の医師生活に繋げられるよう努めたいと思います。

実は、私は夫の留学に帯同することに前向きではありませんでした。しかし、今はドイツに来て良かったと心から思っています。研究生活だけでなく、ドイツの生活そのものが私や家族にとって貴重な経験となっているからです。文化や考え方の違いにより、これまで考えもしなかったことを深く考えるようになりました。このことは、人として、医師としての成長の助けになると確信しています。

さて、ドイツのお勧めは沢山あるのですが、私の一番はクリスマスマーケットです。十一月下旬からクリスマスまで各地で開催され、グリューワイン、温かい食事を寒空の下で楽しみ、ツリーのオーナメントやプレゼントを買い求める人たちが溢れる素敵な屋外マーケットです。昨年はほぼ毎週どこかのクリスマスマーケットに出かけていました。

苦あり楽ありですが、素晴らしい留学生活です。これらを支えてくれる全ての方へお礼を申し上げ、留学便りとしたいと思います。本当にありがとうございました。

University of Hawaiiへの留学を終えて

医学科六年生　近江淳平

三月十八日から二十二日までUniversity of Hawaii, John A. Burns School of Medicine（JABSOM）に留学してきました。もともと英語の勉強が好きだったこと、これまでと大きく異なる環境のもとで医学を学ぶことに興味が湧いたことが志願のきっかけでした。

JABSOMでは身体診察の講義、模擬患者に対する問診、身体診察というOSCEのようなことをしたり、禁煙の勧めや白血病の告知をしたりすることもありました。PBLのように受診までの簡単なストーリーが与えられ、想定された患者に対し学生が質問をしながら鑑別診断をしていくという授業もあり、それは英語で医学を学ぶ面白さを実感させてくれるものでした。試験のために勉強する英語ではなく臨床で用いるツールとするための有機的な学習ができました。授業は他大学での選抜を勝ち抜いた優秀な学生と一緒に参加するので彼らのレベルの高さに驚くこともあり、そんな中で私ももっと発言できるようになりたいと思うようになりました。

この留学で学ぶのは単なる試験のための勉強ではありません。ハワイで学んだスタイルは、伸び伸びとした環境の中で仲間と刺激しあい、もっと学びたいという意欲を掻き立ててくれるものです。学んだことを診察に活かすことが出来れば本当によく褒めてくれますし、できなかったときもこうするとより一層よくなるよというように、いわゆる褒めて伸ばしてくれる教育です。医学だけでなく、文化交流としてフラダンスのレッスンを受けたり、首にかけるレイを作ったりもしました。日本に交換留学生として来る予定のJABSOMの学生達と問診の練習をしたり、恋愛の話をしたりもしました。放課後は自由な時間を過ごすことができるので他大の学生と海に行って泳いだり、早朝登山をしたり、ショッピングや食事を楽しんだりしました。

私がJABSOMで得たことは、学びは本来楽しいものであるべきだし、仲間と一緒に学ぶと有機的なものになるし、学びの成果が発揮された時にはその喜びを仲間と共有できる環境は重要だという考えです。

ハワイ大学での研修

医学科六年生　小田桐直生

二〇一八年三月十八日から二十二日までの五日間、ハワイ大学で開催されたUniversity of Hawaii Clinical Reasoning Workshopに参加する機会を頂きました。お陰様で五日間という短い期間ではありましたが多くのことを学んでくることができましたので、御報告させて頂きます。

医学部のあるハワイ大学マノア校は海沿いに位置しています。近くにビルが立ち並びつつも大学の裏には緑豊かな公園と美しい海が広がり、都市と自然に囲まれた非常に心を引かれるキャンパスでした。先生曰く、空きコマでサーフィンをしている学生もいるとか…。そんな魅力的なキャンパスで研修できるということもあり、僕は研修前から興奮が冷め止まない状態

（次ページへ続く）

写真コラム（4）「岩木山の雪形」

脳血管病態学講座
教授　今泉忠淳

弘前市の西に、岩木山が聳えています。岩木山は独立峰であり、みなさんご存知の通り、津軽富士とも呼ばれ、その姿は美しいです。日本に医学部は82校ありますが、こんな素晴らしい山がすぐそばにある医学部はあまりないと思います。多用な日々を過ごしていると、岩木山があることは当たり前のことになってしまい、あまり注意しなくなりなりがちです。しかし、岩木山の姿は、四季折々に変化しています。写真は、新緑の頃の弘前大学医学部附属病院と岩木山です。弘前市内で新緑が美しくなるころ、岩木山の残雪は少しずつ減っていき、様々な残雪の模様が見られ、これを「雪形」といいます。弘前から見る岩木山には三つの頂が見えますが、真ん中の頂のところには「種まき爺」の姿が、左側の沢には「燕」の姿がみえます。日々の勉学や教育・診療・研究の合間に、ちょっと時間をとって、岩木山を眺めてみましょう。

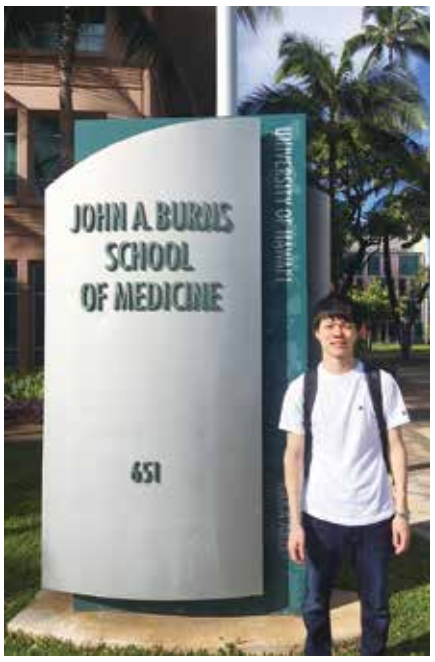
（前ページより）

でした。また、日本とアメリカの医学を比較するという意味でも関心が深く、多くを学ぶ決意を持って研修に臨みました。

実際に研修をしてみて感じたのは、日本でもアメリカでも診療の仕方は似ているという点です。例えば問診や診察の方法、疾患の鑑別は、弘前大学で学んだ内容とほぼ同じことを先生方が仰っていました。自分が通う大学での勉強が世界に通じるというのは自信に繋がるので、この気付きはとても良い収穫だったと思います。

特徴的だと感じたのは、大学内に診察室と病室があることです。病院ではないのでもちろん練習用ですが、診察室は本物と全く同じクオリティーで、診察器具一式が完備されていました。この診察室は予約をすれば学生は自由に使うことができます。また、病室も本物と同じ造りで、ベッドにはバイタルが設定可能なマネキンが横たわっていました。このようにハワイ大学ではより実践的な教育をするための設備が整っています。僕はこのような環境で研修することで、実臨床を見据えた勉強の大切さに気が付くことができました。

今回の研修を通じて自分のやるべきことを再確認できたので、これを活かして今後に繋げていく所存です。このような貴重な機会を設けてくださり、本当にありがとうございました。



海外臨床研修を体験して

台湾での交換留学を終えて

～Mackay Memorial hospital in Taipei～

医学科六年生　光岡　明日香

平成三十一年四月一日～四月二十六日までの四週間、台北にある馬偕記念大学の総合内科、小児科で研修させていただきました。病院では馬偕大学の学生や先生方とともに病棟実習や講義、外来、手技に参加しました。台湾では中国語が使われていますが病院内ではカルテ、カンファレンスは全て英語、学生に対する説明も全て英語でした。先生方にはものすごい勢いの英語で熱心に疾患について説明していただき、最初はとにかく圧倒され、その後徐々に何とか聞き取れるようになっても「君だったらどうする？」「日本ではこういう場合どうする？」と質問されると途方に暮れてしまい自分の英語というかそれ以前に医学知識のなさに今さらながら落ち込みました。学生達は「あまり英語上手でなくてごめんね」と言いながらもすごい勢いで英語で話しかけてくれるため、英語が全然上手ではない私は何度も聞き返し、ラインの返信も英語が早すぎてついていけず語学力の差に改めて圧倒されました。それでも分からない単語を復習し、図書館にある教科書（中国語より圧倒的に英語版が多い！）で勉強し、友達の英語表現を真似したりして翌日実際使ってみることで得た知識はこの先絶対忘れないと思います。実習で印象に残っているのは内科病棟に緊急入院してきた日本人男性に対して問診、診察し先生に英語で所見を報告し、今後の方針を一緒に考えたこと、さらに家族に対して通訳したことでした。アスカが通訳してくれて助かったと先生には言ってもらえ、家族にも日本語ができる人がいてくれて本当に心強かったと言ってもらえ、ちょうど自分のできなさを痛感していた時だったのでとても嬉しかったことを覚えています。実習終わりには毎日色んなところに行き、辛いものからスイーツまで、地元の人でいっぱいの居酒屋や屋台から高級料理までたくさん食べられました。一ヶ月があっという間でまだまだ滞在したいくらいでした。貴重な機会をくださった袴田教授、Tzu-Chi Hsu教授を初めとする皆様に感謝申し上げます。

海外臨床研修を体験して

台湾実習を終えて

医学科六年生　西方　一将

私は四月一日から四月二十六日にかけて、馬偕記念医院の総合内科および小児科にて実習をさせて頂きました。

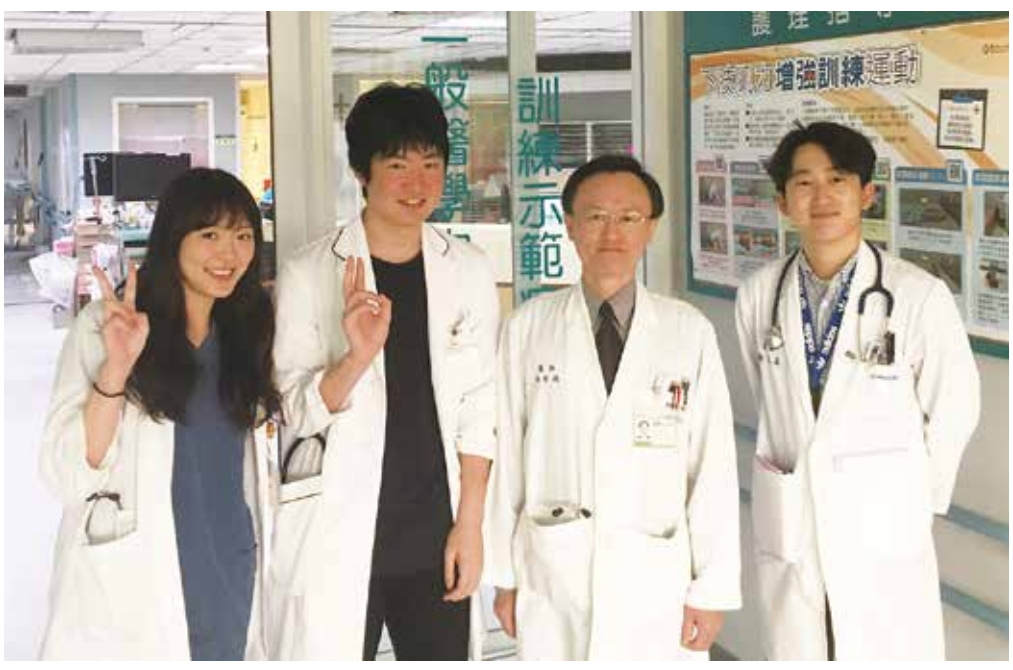
病棟実習では一般的な身体診察等に加えてNGチューブ、膀胱カテーテル、褥瘡処理、血液ガスなどの基本的な手技や、日本人患者に対する外来を担当させていただきました。手技中に患者さんが苦しんでいてもどんな言葉をかければ良いのかわからずに無言になってしまうなど言葉の壁を感じさせられることも多々あり、また手技の道具や方法が日本と異なり困惑することもありましたが、現地の先生方・学生が面倒見よく教えてくださり本当に助かりました。また、英語も片言な見知らぬ日本人にも嫌な顔一つせず喜んで応じてくださった患者さん達には本当に頭が上がりません。

病棟実習の合間には学生レクチャーがあり、現地の五～七年生と一緒に身体所見の取り方や超音波検査の見方などを勉強できました。とても楽しく充実した授業でしたが、「鑑別疾患を挙げてみて」と言われたときに、「腸重積」や「憩室炎」と言いたくても英語名が思い浮かばないなど、「読めば分かるけど発音が分からない」と感じることが多く、自分の意見を伝えられるように医学英語を勉強する必要があると感じました。

今回の実習全体を通じて、台湾の医学教育の良さと日本の医学教育の良さの双方を実感することができました。前者としては、やはり英語で診療を行うため日常的にUp to date等のコンテンツを用いることで世界標準の知識が身に付くこと、少人数グループで診療を行うことで学生がより主体的に行動できる点だと考えます。反対に後者としては、言語の壁を除けば医学的知識においては日本の学生も引けを取らないと感じましたし、学業だけではなく部活動やアルバイト等により人間性を育むという点は日本人学生の長所であると感じました。

実習後には現地の学生や先生方が居酒屋や夜市を案内してくださり、台湾の文化・グルメを堪能できました。個人的に興味のあった台湾プロ野球も満喫できましたし、この一か月で一生分のタピオカを摂取できたと思います。

最後に、今回の実習を手配してくださった袴田教授と許教授、および学務委員会の黒瀬教授と加藤教授をはじめとする先生方および学務の方々に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



生体構造医科学講座／神経解剖・細胞組織学講座

生体構造医科学講座　助教　髙橋一人

生体構造医科学講座は平成二十四年より下田浩先生が教授に就任され教室運営に当たられていますが、同時に神経解剖・細胞組織学講座の主任も併任されています。そのため下田教授は年間を通して解剖学全般（肉眼解剖学・組織解剖学・脳神経解剖学）にわたる教育を担当されており、各講座のスタッフが分担してこれを支えていますが、研究面では両講座が一つになり、力を合わせて複数のプロジェクトを進めています。学生と濃密で膨大な時間を共用する人体解剖学実習と組織学・神経解剖学実習を中心とした学生教育に没頭するあまり、研究に割く時間をつくるのが難しい日もありますが、例え牛歩でも僅かな隙間を見つけて前に推し進めることが私たち解剖学スタッフの気構えです。

解剖学教室の研究活動は現在二つの側面をもっています。この二つの側面は全国の医学研究者に愛読されている「実験医学」の特集記事（(33(8), 2015; 35(3), 2017）にも紹介されています。一つは従来の解剖学研究のスタイルを反映するもので、血管・リンパ管系の形態・病態形成と個体・系統発生を中心に生体の生命現象をマクロからミクロ・ナノレベルまで横断的に追究する研究です。特に最近では国内外の社会的関心の高まりを受けて、これまでほとんど情報がなかったヒトのリンパ系について顕微解剖学的アトラスの開発（第三十七回唐牛記念医学研究基金助成：成田）を、本学白菊会のご理解とご協力のもとに行っています。一方、これに相反してモノを創造する研究がもう一つの教室の顔となっています。日本のモノづくり技術を応用して解剖学的視点より細胞から三次元の器官を創り出し、これを再生医療材料や創薬、ならびに化成品・化粧品の開発研究に応用するとともに、実験動物を用いない新たな医学研究モデルとして発展させることを目指しています。これまでに「未来医療を実現する医療機器・システム研究開発事業」（NEDO～AMED）による「iPS細胞由来心筋細胞を用いた小口径血管を有する立体心筋組織の開発」や「血管・リンパ管網を有するヒト人工腹膜組織の開発」などを行い、人工腹膜組織については特許取得（浅野・下田）に至り、本学の先生方のご研究にもご活用頂いています。さらに現在、血管・リンパ管を内蔵するハイブリッド型3Dヒト皮膚モデル（コスメトロジー研究振興財団：高橋・下田）やscaffold-freeヒト3D神経組織（第三十七回唐牛記念医学研究基金助成：浅野）など複数の立体組織の開発を手掛け、その医療応用と実験動物代替実験モデル開発に向けた研究を進めています。加えて昨年度より、JST研究成果最適展開支援プログラムによる「三次元生体組織の全自動製造システムの開発」ならびにJST未来創造事業による「組織工学技術を応用した自動食肉資産技術の創出」のプロジェクトにも参画しています。こうして改めて教室の研究を俯瞰しますと、二つの顔をもつだけでなく、そのテーマも多岐に渡っているようですが、実は解剖学教室で一貫して培われてきた日本人の職人的な気質と知恵が全ての源流となっています。今後もその精神をもって下田教授が唱える「beauty is truth, truth beauty」を合言葉に日本発の研究をこの弘前から発信していけるようにスタッフ一同精進していきたいと思っております。今後とも皆様のご叱正とご指導を賜りますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

胸部心臓血管外科学講座

胸部心臓血管外科学講座　教授　福田幾夫

胸部心臓血管外科学講座は心臓血管外科および呼吸器外科の臨床研究と基礎的研究を行なっています。基礎的研究は中華人民共和国からの留学生が主体となって行なっており、この主要なテーマは、1)高齢者における大動脈弁石灰化の分子生物学的解析、2)低侵襲呼吸器手術の予後の解析、3)人工胸膜の開発です。大動脈弁石灰化に関する研究は、大徳和之准教授と于在強助教が中心となり、脳神経血管病態研究施設脳血管病態学講座の瀬谷和彦助教の協力のもとで研究を進めています。かつて心臓外科医は、石灰化した大動脈弁は、カルシウムの塊としか考えていませんでした。しかし、薬理学講座の古川賢一先生（前准教授）が前縦靭帯骨化症ラットの大動脈石灰化の機序を研究しておられたことを知り、ご相談申し上げたところ、大動脈弁から抽出した間質細胞の培養系を確立してくれました。この培養系の確立には、于在強助教が本学大学院在学中に熱心に取り組んでおり、多くの表彰と補助金を獲得できるまでになっています。十年近くの継続的研究により、大動脈弁石灰化の引き金になる因子が、TNF-αであること、BMP2-Dlx5-ALP経路を介して石灰化が誘発されること、高リン状態で石灰化が亢進する事を解明しました。これにより、石灰化経路の選択的阻害薬の網羅的探索を行っています。さらに、脈管石灰化を促進するとされているワルファリン誘因性石灰化の機序も解明しました。我々の研究の最終目標は、石灰化阻害薬を用いて初期の大動脈弁石灰化病変の進行を抑制すること、さらには遺伝子検索による大動脈弁石灰化関連遺伝子を見つけ出し、ハイリスク例に対して石灰化予防の介入を行うことです。高齢化により石灰化大動脈弁狭窄が増加していますが、将来はリウマチ性弁膜症のように、この疾患の予防により世の中から外科治療の対象例が激減するかもしれません。低侵襲呼吸器手術の予後の解析では、呼吸器外科グループの大学院生、宋成洋先生が当科での肺区域切除術の予後解析を行い、症例を選べば縮小手術でも予後は変わらないことを明らかにしました。さらに低侵襲手術の適応を明らかにしたいと考えています。人工胸膜の研究は、まだ開始したばかりの研究テーマですが、生体吸収シートと培養細胞の積層技術を用いた人工胸膜を開発し、手術時の肺の損傷修復に応用するための基礎的研究を行なっています。

当講座のもう一つの中心課題として、理工学部との共同研究があります。大動脈内の血流の可視化は私が赴任して新しく開始した研究テーマです。体外循環中の大動脈送血の血流を光造形法、微粒子を用いた流速計測法、コンピュータシミュレーション技術など最新のテクノロジーを組み合わせて解明し、動脈硬化病変の強い胸部大動脈瘤での脳合併症の予防技術として、心臓血管外科領域の進歩に大きく寄与しました。さらに、より安全な体外循環技術を確立するため、弘前大学医学部附属病院臨床工学部の後藤武技師長と連

（次ページへ続く）

胸部心臓血管外科学講座の中華人民共和国からの大学院生と福田幾夫教授、大徳和之准教授

部活動紹介

（前ページより）

携して、従来ほとんど解明されていなかった脱血を科学的に解析しています。また、大血管外科における低侵襲手術であるステントグラフト内挿術を安全に適応拡大するための新たなデバイスの開発や、採血ロボット、カテーテルロボットの開発も行っています。これらの共同研究により理工学部ではすでに数件の特許を申請しておりますし、我々も二件の特許を取得しています。今後、今までの研究ネットワークをさらに発展させて、より低侵襲な心臓血管外科治療の開発、病態の解明と予防法の解決を目指してゆきたいと思います。

水泳部

医学科三年生　岩下　葵

弘前大学医学部水泳部は現在男子七名、女子七名が所属しています。私達医学部水泳部の特徴は、全学の水泳部と共に活動している点です。大学から水泳を始めた初心者から、小さい頃から水泳を続けている経験者まで幅広い部員が所属し、共に切磋琢磨しながらそれぞれの目標に向けて日々努力しています。水泳部としては毎年六月に行われます北部学生選手権を最も重要な大会として重きを置いており、昨年度も私立の強豪校との接戦の末、日本学生選手権（通称インカレ）への切符を手にすることが出来ました。多くの先輩方が卒業してしまいましたが、新入生も入部し新体制となった水泳部は今年度の北部学生選手権総合優勝を奪還します。

昨年度の成績

弘前大学医学部水泳部は昨年度、北海道・札幌市で行われた北日本医科学生水泳大会（通称北医体）、岩手県・盛岡市で行われた東日本医科学生体育大会（通称東医体）に出場しました。北医体では女子総合三位、男子総合六位、男女総合五位、個人とリレー合計十四個の入賞を収めました。また、東医体では女子個人で四個の入賞を収めることができました。今年度はさらなる良い成績を収め、報告できるよう努力します。

大学水泳

私は中学生までスイミングスクールで水泳を習い、大学でまた水泳を始めました。スイミングスクールでの水泳と大学水泳は異なる点が多くあります。以前私が習っていた水泳は個人競技であり、個人個人がそれぞれの目標タイムを突破できるように、練習していました。つまり個人競技だったのです。ですが大学水泳は団体競技であり、それぞれ目標タイムやそれまでの道のりは異なるけれど皆北部学生選手権弘大総合優勝という同じゴールを目指し、練習しています。この大学にも幼い頃水泳を習っていた方は多くいると思います。ぜひ大学水泳の素晴らしさを皆さんに知っていただけたら幸いです。

山岳部

医学科四年生　野口光司

弘前大学医学部山岳部は、部員のほとんどが大学で始めたばかりの初心者で、県内の山を中心に登山活動をしています。体力的・技術的にきつい山行はあまり部員の間で人気がなく、授業や実習の合間の土日や長期休暇に手軽に行けるものがほとんどです。

いままで雪がない時期のハイキングが活動の中心でしたが、ハイキングコースは県内で少ししかなく、山を登るスポーツとしては多少物足りないと思います。そこで近年、沢登りやバックカントリースキー（山岳スキー）に手を出し始めました。沢登りとは、登山道具を背負いながら沢を歩き、時には釣竿を片手に岩魚を探し、時には豪快な滝を登って川を遡るスポーツです。県内では六月から十一月頃まで白神山地や八甲田山系で沢登りをすることができます。一方、山岳スキーとは、ゲレンデスキーとは違って、山の麓からスキーを履いたまま登って、上から滑って降りてくるスポーツです。スキー板の底に雪面を登るための布の様なもの（シール）を貼って、自由に雪の斜面を歩くことができます。十二月から五月まで岩木山や八甲田山系ではどこでも山岳スキーで登ることができて、その分だけ爽快に滑って来られます。競い合う大会はなく、季節通してマイペースに楽しめる点が魅力です。体力も付きます。重い荷物を背負った状態で長時間運動する状況は他の部活にあるでしょうか。山で一泊するのであれば、リュックの重量が二十～三十kgになることがざらにあります。山域によっては何時間もかけないと目的地に着かないところもあります。登山を続けていると足腰が強くなること間違いないです。

山岳医療にも興味があるので、近々、夏に山小屋診療所でのボランティア活動ができないか考えております。登山の奥深い世界について、この短い欄で、稚拙な文章でお伝えするのは無理がありますが、その魅力や特殊性について少しでも分かっていただければ幸いです。

コラム　医学部こぼれ話…

最近の医学関連学会はどんどんと大きくなっています。総会になると会場のキャパシティーの関係上もはや大都市（札幌、東京、大阪、名古屋、京都、福岡）のみに集中してしまう傾向があるようです。折角、色々な場所に行くのだからその土地土地の観光や食事も楽しみたいものです。学会開催中は観光や食事を楽しみたいといっても現実には学会を抜けて昼に観光する訳にもいきません。そして、学会が終わるのが日曜であれば、翌日から大学で仕事があるわけですぐ帰らなくてはならず、やはり観光する時間はありません。せめて夜位は楽しみたいと思うのは皆さん同じではないでしょうか。その点、個人的には札幌、福岡は大歓迎です。千葉の幕張はいつも行く会場で楽しい場所もなく、あまりうれしくありません。少し小さめの学会が地方で開催され、時間的余裕のある学会があれば教室員に演題を作らせて是非参加するのですが。弘前での学会開催に関与するときにいつも思うことは、弘前市に朝八時位から解錠してくれる公営の会場があればどんなにいいことかと思います。

グリーン・キャンパス・クラブ

医学科四年生　濱野直樹

大間のマグロや八戸のスルメイカなど全国的に見ても海に恵まれるイメージの強い青森県ですが、岩木山をはじめとする山々やりんご畑など陸の自然も豊かな県です。白神山地が平成五年に日本で初めてのユネスコ世界自然遺産に登録されているように、青森県は全国でも稀に見るほど緑にも恵まれています。しかし弘前大学の医学部医学科は正門に生い茂る木々を除くと、いささか殺風景が過ぎるのが現状です。グリーンキャンパスクラブはそんなキャンパスで始まった活動クラブです。

校内の緑化活動を当初は行なっていたと昔のグリーンキャンパスクラブを知る方々から聞いていますが、ここ数年は元々農業畑であった学士編入生の影響もあってか校内での畑作に力を入れています。現在二年生が授業を受けている基礎棟校舎の裏の空きスペースに畑を備えており、活動期間は五月から始まり雪の降り始める直前までと、他の部活と比べいささか短めでお手軽です。毎年様々な作物を植えて、育てて、それを食べるといった活動を行なっています。去年は二十種五十九苗もの作物を育てる事に挑戦し、特にトウモロコシはスーパーに置いているようなとても大きなものを沢山収穫できました。もちろん失敗する作物もあります。去年は本来梅雨である六月中に日照りが続いたためか、校舎の影に殆ど

（次ページへ続く）

（前ページより）

ならない範囲に植えていた枝豆の出来が悪かったのをよく覚えています。

緑を大事にする過程で医学生が将来とは違う形で生命に触れ向き合う、そんな活動と言うと聞こえが良過ぎるかもしれませんが、これからも活動を支持していただけると幸いです。

テレビに出演して

ATVテレビ診察室に出演して

泌尿器科学講座　教授　大山　力

二月三、十、十七、二十四日の四回にわたって「ロボット支援手術」の話題提供をさせて頂きました。日曜日早朝の放送ですが、年配の方々を中心に視聴者の方も多く、外来診療中に「先生、テレビ見たよ。」と患者さんからも頻回に声をかけられます。

近年、前立腺癌の頻度が急激に増加し、男性の癌罹患率の首位に躍り出ようとする勢いです。根治的前立腺全摘除術は早期前立腺癌治療の重要な選択肢の一つですが、術中の大量出血、直腸損傷、術後の尿失禁、性機能障害など克服すべき問題点も抱えていました。また、時代は低侵襲手術を求め、我々も小切開手術、腹腔鏡手術などの低侵襲手術の確立に取り組んできましたが、恥骨後面の狭い骨盤内での手術に限界も感じていました。

そこに現れたのが手術支援ロボットda Vinciです。弘大泌尿器科では二〇一一年四月に東日本で三番目にda Vinciを導入し、これまで七百件を超える前立腺全摘除術をはじめ、膀胱全摘除術三十四例、腎部分切除術六十例を実施してきました。ロボットという名前がついていますが、ロボットが自分で動くのではなく、操作するのは我々外科医です。腹腔鏡手術ではモニター上の腹腔内の画像を見ながら手術を行うが、映し出されるのは平面画像（2D）です。一方、da Vinciは十五倍拡大の立体画像（3D）で観察しながら手術ができます。しかも、da Vinciの〝手〟は微細に術者の思い通りに動かすことができます。その結果、出血量は従来の十分の一になり、術後尿禁制も著明に改善しました。何より患者さんの評判が非常に良く、手術翌日に「先生、全然痛くないよ」という言葉を幾度となく耳にしました。弘大病院では、当科のほかに消化器外科で胃癌、直腸癌、膵癌の手術、産婦人科では子宮癌の手術を多数実施しています。これを受けて、本院では二〇一三年十一月に二台目となる当時の最新機種da Vinci Siを導入しました。泌尿器科と産婦人科は東北・北海道唯一のライセンス取得のための症例見学施設に指定されています。平成三十年四月にはロボット支援下膀胱全摘術をはじめ、縦郭腫瘍、胃癌、肺癌、直腸癌、子宮体癌など新たに十二術式が保険収載され、その保険適応は拡大傾向にあります。

さて、手術支援ロボットダヴィンチは逐次改良が重ねられ、最新機種はXiになっています。また、ダヴィンチ以外の手術用ロボットの開発も進んでおり、国産の手術支援ロボットの登場も目前に迫っています。これからも、最新の手術支援器具を駆使して、患者さんに優しく、十分御満足いただける最高水準の医療を提供していきたいと思っております。

「ATVテレビ診察室」に出演して

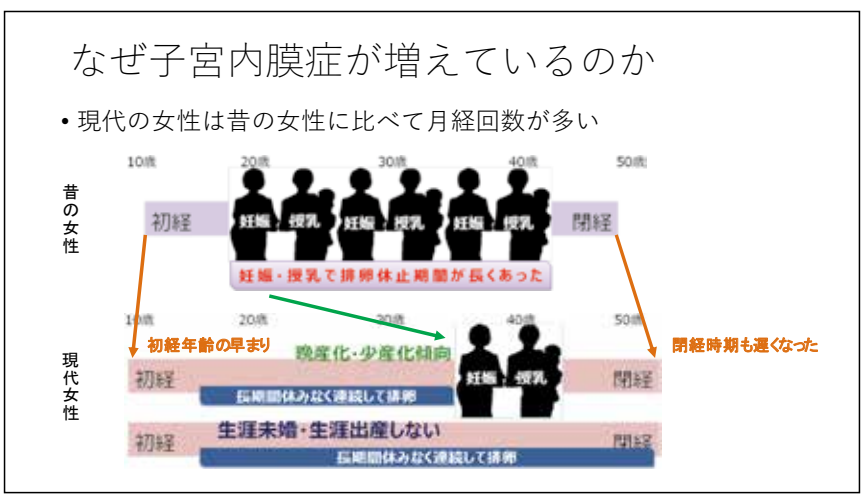
附属病院　産科婦人科　講師　福原　理恵

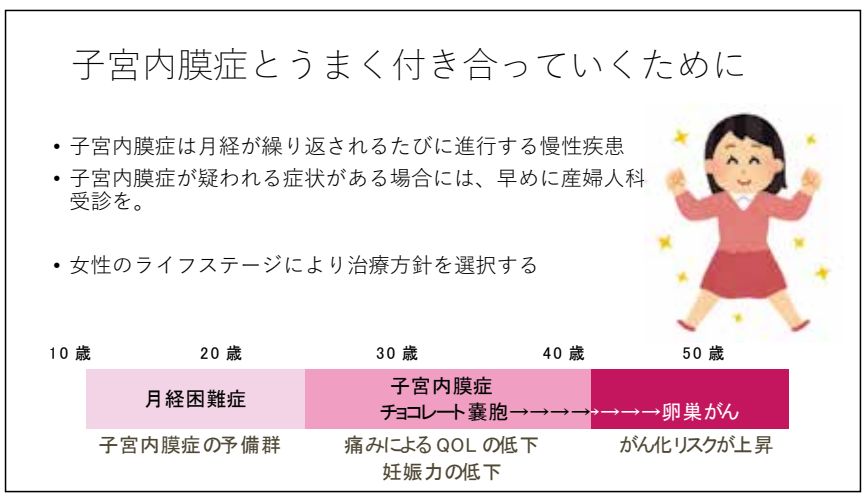
このたび、三月二十四日にATVテレビ診察室に「子宮内膜症」というテーマで出演させていただきました。子宮内膜症は現代女性において、近年増えている疾患であり、生殖年齢女性の十％が罹患しているといわれています。子宮内膜症のもっとも多い症状は月経痛ですが、日本ではまだまだ月経痛は我慢するものという意識が根強くあり、病気に気づかずに過ごしている女性がかなり多く、約十％の患者さんしか治療を受けていないと推定されています。

子宮内膜症は、本来、子宮の内側だけにあるはずの子宮内膜が、それ以外の場所にできてしまう病気です。その異所性にできた内膜も、本来の子宮内膜と同じように、月経と同じサイクルで女性ホルモンの影響をうけ、増殖や出血を繰り返してしまうため、様々な症状をひきおこし、閉経するまで少しずつ進行します。

子宮内膜症に罹患する人が増えている最大の原因は、女性のライフスタイルの変化による月経回数の増加といわれています。現代女性では、昔の女性と比べて、初経年齢は早くなり、閉経年齢は遅くなっており、月経のある期間は長くなっています。また、晩婚、晩産化が進み、生涯子どもをもたない選択をする人も増えています。つまり、妊娠によって月経が中断されることなく繰り返され、女性が一生のうちに経験する月経の回数は、昔の女性に比べて多くなっています。子宮内膜症は月経が繰り返されるたびに進行する病気ですから、現代女性は子宮内膜症に罹患しやすくなっているといわれています。

子宮内膜症で問題になるのは、(1)痛み(2)不妊(3)がん化の三つであり、それぞれの女性のライフステージで、何が問題になるのかが異なり、それによって治療方針が異なります。日常診療で、強い月経痛を病気と知らずに長年我慢をし、子宮内膜症が進行した結果、不妊や疼痛、がんに悩む患者さんを多くみかけます。今回は、月経痛という身近な症状が、病気の重要なサインである可能性やその原因となる子宮内膜症について、理解していただけるようにお話させていただきました。お一人でも、視聴者の皆さんの中で、月経痛に悩む方が病院を受診するきっかけになったことを願っています。





書籍のおしらせ

「野球検診手帳」

前田　周吾（整形外科学講座）

この度、青森県スポーツドクターの会、弘前大学大学院医学研究科整形外科学講座編集の「野球検診手帳」が弘前大学出版会より出版となりました。本書では成長期の野球選手に必要な医学的な情報、正しいトレーニング方法や「野球肘検診」の意義などを野球選手が理解しやすいようにまとめています。成長期野球選手に多い肘の障害は「野球肘検診」で早期に発見し対処することで、将来への悪影響を少なくすることができます。この手帳は「野球肘検診」の記録手帳にもなっており、選手・指導者・医療従事者間での情報共有がスムーズにできるようになると思います。選手が健全に野球を継続できるように本書を活用してくれることを願っています。

人事異動（H31.3.1～R1.5.31）

●医学研究科

【昇任】

発令日	所属	職名	氏名	前所属
H31.4.1	胸部心臓血管外科学講座	准教授	皆川　正仁	胸部心臓血管外科学　講師
H31.4.1	神経精神医学講座	准教授	斉藤　まなぶ	神経科精神科　講師
H31.4.1	大館・北秋田地域医療推進学講座	准教授	坂本　義之	消化器外科，乳腺外科，甲状腺外科　講師
H31.4.1	むつ下北地域医療学講座	准教授	遠藤　哲	消化器内科，血液内科，膠原病内科，講師
H31.4.1	むつ下北地域医療学講座	准教授	村上　宏	内分泌内科，糖尿病代謝内科　講師
H31.4.1	胸部心臓血管外科学講座	講師	木村　大輔	胸部心臓血管外科学　助教
H31.4.1	小児科学講座	助教	八木　弘子	小児科学　助手
H31.4.1	眼科学講座	助教	山内　宏大	眼科学　助手
R1.5.1	むつ下北地域医療学講座	講師	大鹿　周佐	整形外科学　助教

【採用】

発令日	所属	職名	氏名	前所属
H31.4.1	脳神経内科学講座	教授	冨山　誠彦	青森県立中央病院
H31.4.1	消化器外科学講座	助教	山名　大輔	国立病院機構弘前病院
H31.4.1	内分泌代謝内科学講座	助教	対馬　悠子	内分泌内科，糖尿病代謝内科　医員
H31.4.1	神経精神医学講座	助教	柞木田　礼子	つがる総合病院
H31.4.1	整形外科学講座	助教	佐々木　規博	国立病院機構弘前病院
H31.4.1	泌尿器科学講座	助教	岡本　哲平	（公財）鷹揚郷青森病院
H31.4.1	地域医療学講座	助教	木村　裕輝	大館市立総合病院
H31.4.1	未病科学研究講座	助教	Kyi Mar Wai	東京大学大学院医学系研究科
H31.4.1	分子病態病理学講座	助手	遲野井　祥	内分泌内科，糖尿病代謝内科　医員
H31.4.1	分子病態病理学講座	助手	佐々木　崇矩	医学部保健学科　学生
H31.4.1	病理生命科学講座	助手	赤石　隆信	（医）白生会胃腸病院
H31.4.1	神経精神医学講座	助手	吉田　和貴	大館市立総合病院
H31.4.1	眼科学講座	助手	江目　孝幸	大館市立総合病院
H31.4.1	救急・災害医学講座	助手	紺野　真緒	麻酔科　医員
H31.4.1	地域医療学講座	助手	原　藍子	眼科　医員
H31.4.1	地域医療支援学講座	助手	横山　美奈子	大館市立総合病院
H31.4.1	地域救急医療学講座	助手	小田切　理	山形県立河北病院
H31.4.1	地域救急医療学講座	助手	亀井　敬太	高度救命救急センター　医員
H31.4.1	附属子どものこころの発達研究センター	特任助手	森　裕幸	海老名市立わかば学園
H31.4.1	附属子どものこころの発達研究センター	特任助手	新川　広樹	北翔大学教育文化学部・生涯スポーツ学部
R1.5.1	胸部心臓血管外科学講座	助手	佐藤　史絵	呼吸器外科，心臓血管外科　医員

【配置換】

発令日	所属	職名	氏名	前所属
H31.4.1	救急・災害医学講座	講師	伊藤　勝博	高度救命救急センター　講師
H31.4.1	心臓病遠隔管理システム開発学講座	講師	堀内　大輔	不整脈先進治療学講座　講師
H31.4.1	むつ下北地域医療学講座	講師	島田　美智子	循環器内科，腎臓内科　講師
H31.4.1	消化器血液内科学講座	助教	菊池　英純	消化器内科，血液内科，膠原病内科　助教
H31.4.1	胸部心臓血管外科学講座	助教	齊藤　良明	呼吸器外科，心臓血管外科　助教
H31.4.1	胸部心臓血管外科学講座	助教	于　在強	高度救命救急センター　助教
H31.4.1	皮膚科学講座	助教	是川　あゆ美	皮膚科　助教
H31.4.1	産科婦人科学講座	助教	横田　恵	産科婦人科　助教
H31.4.1	産科婦人科学講座	助教	伊東　麻美	産科婦人科　助教
H31.4.1	脳血管病態学講座	助教	川口　章吾	高度救命救急センター　助教
H31.4.1	総合地域医療推進学講座	助教	片山　耕輔	脳神経外科　助教
H31.4.1	女性の健康推進医学講座	助教	大石　舞香	産科婦人科　助教
R1.5.1	脳神経内科学講座	助教	今　智矢	脳神経病理学講座　助教

【辞職】

発令日	所属	職名	氏名	異動先等
H31.3.31	神経精神医学講座	准教授	古郡　規雄	獨協医科大学
H31.3.31	胸部心臓血管外科学講座	准教授	鈴木　保之	筑波大学地域医療教育センター
H31.3.31	大館・北秋田地域医療推進学講座	准教授	工藤　大輔	つがる西北五広域連合つがる総合病院
H31.3.31	分子病態病理学講座	助教	稲葉　渉	㈱第一岸本臨床検査センター
H31.3.31	病理生命科学講座	助教	呉　雲燕	自治医科大学
H31.3.31	神経精神医学講座	助教	久保　一利	大館市立総合病院
H31.3.31	消化器血液内科学講座	助教	間山　恒	国立病院機構弘前病院
H31.3.31	循環器腎臓内科学講座	助教	澁谷　修司	大館市立総合病院
H31.3.31	胸部心臓血管外科学講座	助教	小笠原　尚志	労働者健康安全機構青森労災病院
H31.3.31	産科婦人科学講座	助教	石原　佳奈	むつ総合病院
H31.3.31	地域救急医療学講座	助教	久保　寛仁	三沢市立三沢病院
H31.3.31	分子病態病理学講座	助手	板橋　智映子	八戸市民病院
H31.3.31	循環器腎臓内科学講座	助手	中田　真道	村上新町病院
H31.3.31	胸部心臓血管外科学講座	助手	川村　知紀	労働者健康安全機構青森労災病院
H31.3.31	整形外科学講座	助手	竹内　政道	弘前市立病院
H31.3.31	眼科学講座	助手	田名部　玲子	大館市立総合病院
H31.3.31	救急・災害医学講座	助手	川口　純	つがる西北五広域連合つがる総合病院
H31.3.31	脳神経生理学講座	助手	小潟　佳輝	進学
H31.3.31	地域救急医療学講座	助手	小野　浩弥	労働者健康安全機構　青森労災病院
H31.3.31	女性の健康推進医学講座	助手	當麻　絢子	つがる総合病院
H31.4.30	脳神経内科学講座	准教授	瓦林　毅	（公財）老年病研究所
H31.4.30	脳神経内科学講座	助教	廣畑　美枝	田宮病院

【任期満了】

発令日	所属	職名	氏名	異動先等
H31.3.31	地域医療学講座	助教	高橋　静	大阪大学医学部附属病院
H31.3.31	社会医学講座	助手	駒目　瞳	

【定年退職】

発令日	所属	職名	氏名	異動先等
H31.3.31	脳神経内科学講座	教授	東海林　幹夫	（公財）老年病研究所
H31.3.31	病態薬理学講座	准教授	古川　賢一	
H31.3.31	脳血管病態学講座	講師	吉田　秀見	

●附属病院

【昇任】

発令日	所属	職名	氏名	前所属
H31.3.1	消化器外科，乳腺外科，甲状腺外科	講師	三浦　卓也	消化器外科学講座　助教
H31.4.1	消化器内科，血液内科，膠原病内科	講師	澤谷　学	消化器血液内科学講座　助教
H31.4.1	内分泌内科，糖尿病代謝内科	講師	田辺　壽太郎	内分泌代謝内科学講座　助教
H31.4.1	神経科精神科	講師	橋本　浩二郎	神経科精神科　助教
H31.4.1	皮膚科	講師	会津　隆幸	皮膚科学講座　助教
H31.4.1	泌尿器科	助教	相馬　理	泌尿器科　助手
H31.4.1	泌尿器科	助教	松本　哲平	泌尿器科　助手
H31.4.1	眼科	助教	毛内　奈津姫	眼科　助手
H31.4.1	麻酔科	助教	竹川　大貴	麻酔科　助手
R1.5.1	循環器内科，腎臓内科	講師	横山　公章	循環器内科，腎臓内科　助教

【採用】

発令日	所属	職名	氏名	前所属
H31.3.1	循環器内科，腎臓内科	助教	横山　公章	榊原記念病院
H31.4.1	神経科精神科	講師	冨田　哲	神経精神医学講座　助教
H31.4.1	循環器内科，腎臓内科	助教	妹尾　麻衣子	弘前小野病院
H31.4.1	脳神経内科	助教	村上　千恵子	青森県立中央病院
H31.4.1	消化器外科，乳腺外科，甲状腺外科	助教	岡野　健介	青森県立中央病院
H31.4.1	皮膚科	助教	相樂　千尋	皮膚科　医員
H31.4.1	耳鼻咽喉科	助教	三國谷　由貴	耳鼻咽喉科　医員
H31.4.1	麻酔科	助教	村岡　正敏	黒石市国民健康保険黒石病院
H31.4.1	歯科口腔外科	助教	田中　祐介	歯科口腔外科　医員
H31.4.1	歯科口腔外科	助教	古舘　健	歯科口腔外科　医員
H31.4.1	リハビリテーション科	助教	田中　直	JCHO 秋田病院
H31.4.1	集中治療部	助教	太田　大地	八戸市立市民病院
H31.4.1	高度救命救急センター	助教	西崎　公貴	青森県立中央病院
H31.4.1	腫瘍内科	助手	陳　豫	腫瘍内科　医員
H31.4.1	整形外科	助手	小川　哲也	青森県立中央病院
H31.4.1	泌尿器科	助手	久保田　優花	鷹揚郷腎研究所弘前病院
H31.4.1	産科婦人科	助手	小玉　都萌	国立病院機構弘前病院
H31.4.1	産科婦人科	助手	髙林　杏奈	青森県立中央病院
H31.4.1	麻酔科	助手	清川　聖代	東京医科大学病院
H31.4.1	麻酔科	助手	菅沼　拓也	つがる総合病院
H31.4.1	麻酔科	助手	松野　伸哉	国立病院機構弘前病院
H31.4.1	麻酔科	助手	緑川　陽子	麻酔科　医員
H31.4.1	脳神経外科	助手	木下　翔平	青森市民病院
H31.4.1	脳神経外科	助手	佐々木　貴夫	青森県立中央病院
H31.4.1	脳神経外科	助手	柳谷　啓太	青森市民病院
H31.4.1	周産母子センター	助手	嶋田　淳	榊原記念病院
H31.4.1	高度救命救急センター	助手	井川　明子	国立療養所松丘保養園
H31.4.16	脳神経内科	助教	西嶌　春生	青森県立中央病院
R1.5.1	消化器内科，血液内科，膠原病内科	助教	速水　史郎	むつ総合病院
R1.5.1	消化器内科，血液内科，膠原病内科	助教	樋口　博之	青森労災病院

【配置換】

発令日	所属	職名	氏名	異動先等
H31.4.1	周産母子センター	助教	松倉　大輔	産科婦人科学講座　助教
H31.4.1	高度救命救急センター	助教	野村　亜南	救急・災害医学講座　助教

【配置変更】

発令日	所属	職名	氏名	異動先等
H31.4.1	整形外科	助教	佐々木　静	リハビリテーション科　助教
H31.4.1	高度救命救急センター	助手	藤原　望	脳神経外科　助手

【任命】

発令日	所属	職名	氏名	異動先等
H31.4.1	脳神経内科	科長	冨山　誠彦	

【辞職】

発令日	所属	職名	氏名	異動先等
H31.3.31	皮膚科	講師	金子　高英	順天堂大学医学部附属浦安病院
H31.3.31	周産母子センター	講師	阿部　和弘	開業
H31.3.31	脳神経内科	助教	清野　祐輔	国立病院機構弘前病院
H31.3.31	消化器外科，乳腺外科，甲状腺外科	助教	米内山　真之介	つがる総合病院
H31.3.31	整形外科	助教	岩崎　宏貴	国立病院機構弘前病院
H31.3.31	整形外科	助教	工藤　整	むつ総合病院
H31.3.31	耳鼻咽喉科	助教	武田　育子	大館市立総合病院
H31.3.31	産科婦人科	助教	平川　八大	三沢市立三沢病院
H31.3.31	麻酔科	助教	小野　朋子	弘前記念病院
H31.3.31	麻酔科	助教	地主　継	八戸市立市民病院
H31.3.31	歯科口腔外科	助教	今　敬生	開業
H31.3.31	歯科口腔外科	助教	成田　紀彦	北秋田市民病院
H31.3.31	高度救命救急センター	助教	松田　尚也	黒石市国民健康保険黒石病院
H31.3.31	脳神経内科	助手	中村　琢洋	群馬大学医学部附属病院
H31.3.31	腫瘍内科	助手	斎藤　絢介	青森県立中央病院
H31.3.31	泌尿器科	助手	小西　栄	泌尿器科　医員
H31.3.31	産科婦人科	助手	小山　文望恵	むつ総合病院
H31.3.31	産科婦人科	助手	田中　誠悟	青森市民病院
H31.3.31	脳神経外科	助手	片貝　武	脳神経外科　医員
H31.3.31	集中治療部	助手	天内　絵理香	青森市民病院
H31.3.31	周産母子センター	助手	三浦　文武	榊原記念病院
H31.3.31	高度救命救急センター	助手	内田　知顕	国立病院機構弘前病院
H31.3.31	高度救命救急センター	助手	野坂　匡史	弘前小野病院
H31.3.31	高度救命救急センター	助手	若狭　悠介	沖縄県立八重山病院
H31.4.30	整形外科	助教	飯尾　浩平	十和田市立中央病院
H31.4.30	麻酔科	助教	村岡　正敏	国立病院機構弘前病院
H31.4.30	麻酔科	助手	松野　伸哉	黒石市国民健康保険黒石病院
H31.4.30	麻酔科	助手	緑川　陽子	麻酔科　医員
R1.5.31	麻酔科	助手	高橋　枝み	琉球大学医学部附属病院

診療教授等新規称号付与者（H31.3～R1.5）

称号	氏名	所属	期間
診療教授	栗林　理人	神経科精神科	平成31年3月1日～令和4年2月28日
診療准教授	當麻　景章	呼吸器内科，感染症科	平成31年3月1日～令和4年2月28日
診療准教授	佐藤　研	消化器内科	平成31年4月1日～令和4年3月31日
診療准教授	島田　美智子	腎臓内科	平成31年4月1日～令和4年3月31日
診療准教授	照井　健	内分泌内科，糖尿病代謝内科	平成31年4月1日～令和4年3月31日
診療講師	髙安　忍	内分泌内科	平成31年4月1日～令和4年3月31日
診療講師	松橋　有紀	糖尿病代謝内科	平成31年4月1日～令和4年3月31日
診療講師	中島　康爾	皮膚科	平成31年4月1日～令和4年3月31日

臨床教授・臨床准教授称号付与者（平成31年4月1日現在）

称号名	氏名	現職名	称号付与日	称号付与期間	推薦講座
臨床教授	平野　敬之	八戸市立市民病院 第一精神科部長	2019年４月１日	2019年４月１日 ～2022年３月31日	神経精神医学
臨床准教授	佐藤　靖	大館市立総合病院 神経精神科医長	2019年４月１日	2019年４月１日 ～2022年３月31日	神経精神医学
臨床教授	和嶋　直紀	つがる西北五広域連合つ がる総合病院　副院長	2019年４月１日	2019年４月１日 ～2022年３月31日	消化器外科学
臨床教授	工藤　大輔	つがる西北五広域連合つがる 総合病院　消化器外科科長	2019年４月１日	2019年４月１日 ～2022年３月31日	消化器外科学
臨床准教授	櫻庭　伸悟	つがる西北五広域連合つがる総 合病院　消化器外科第二科長	2019年４月１日	2019年４月１日 ～2022年３月31日	消化器外科学
臨床准教授	久保　寛仁	三沢市立三沢病院 外科医長	2019年４月１日	2019年４月１日 ～2022年３月31日	消化器外科学
臨床准教授	米内山　真之介	つがる西北五広域連合つがる総 合病院　消化器外科第三科長	2019年４月１日	2019年４月１日 ～2022年３月31日	消化器外科学
臨床准教授	佐々木　知行	弘前記念病院 院長	2019年４月１日	2019年４月１日 ～2022年３月31日	整形外科学
臨床准教授	伊藤　弘之	青森労災病院 泌尿器科部長	2019年４月１日	2019年４月１日 ～2022年３月31日	泌尿器科学
臨床准教授	片岡　英樹	青森県立中央病院 眼科副部長	2019年４月１日	2019年４月１日 ～2022年３月31日	眼科学
臨床准教授	佐藤　麻希子	大館市立総合病院 産婦人科部長	2019年４月１日	2019年４月１日 ～2022年３月31日	産科婦人科学
臨床准教授	太田　正文	津軽保健生活協同組合 健生病院　救急科科長	2019年４月１日	2019年４月１日 ～2022年３月31日	救急・災害医学
臨床准教授	齋藤　兄治	青森県立中央病院　救命 救急センター救急部部長	2019年４月１日	2019年４月１日 ～2022年３月31日	救急・災害医学

編集後記

ページをめくるように平成から令和の時代に移りました。自粛と悲しみの中で昭和から平成の時代になった時に比べると、実に自然な感がありました。慄然とする震災、自然災害、テロからの憂世、一方で世の中をどこまでも革新するITの進歩、平成を総括するとそうなるでしょうか。

翻って弘前大学は創立七十周年を迎えます。有能な多くの人材が巣立っていることはもちろん、本号のトップに掲載されているように本学COI研究推進機構が日本オープンイノベーション大賞内閣総理大臣賞を受賞したことは、令和でのさらなる発展を遂げることを確信させた弘前大学七十年の底力と総括してもいい大偉業です。

変わる勇気と変わらない強さ。医学部ウォーカーは一九九七年に発刊以来、二十四年にわたり医学部の出来事、事業、顕彰を伝えてきました。弘前大学COIビッグデータは弘前大学を日本に世界に知らしめる財産となり、勇気を持って世界を変貌させる強力な科学データを弘前から発信していくでしょう。医学部ウォーカーは令和の時代も変わることなくしっかりと弘前大学医学部の発展を伝えていくことでしょう。

（横山　記）